

2022 年度  
調査報告書

**小学生のスポーツ活動における  
保護者の関与・負担感に関する調査研究  
(2021)**



# 目次

|                                   |    |
|-----------------------------------|----|
| <b>1. 調査概要</b> .....              | 1  |
| <b>2. 調査結果</b>                    |    |
| 2.1 子どものスポーツ活動 .....              | 4  |
| 2.2 所属する団体の様子 .....               | 9  |
| 2.3 保護者の役割 .....                  | 19 |
| 2.4 スポーツ活動をやめた理由・しない理由 .....      | 28 |
| 2.5 母親自身が子どもの頃のスポーツ経験 .....       | 35 |
| 2.6 保護者の当番制や人間関係に対する思い .....      | 38 |
| <b>3. 父親の関与と母親のやりがい・負担感</b> ..... | 39 |
| <b>4. まとめ</b> .....               | 45 |



# 1. 調査概要

## 1. 1 調査目的

2016年度(2017年2月)に実施した第1回調査に引き続き、子どものスポーツ活動に対する保護者の関与の実態や意識、5年間の変化の様相を明らかにする。

今回の調査では特に、保護者の関与において 1)コロナ禍を挟んだ5年間で変化はみられるのか 2)母親中心のジェンダー構造に変化はみられるのか の2点を検討できるよう、新規項目を追加している。

※2016年度調査の詳細に関しては笹川スポーツ財団(2017)を参照。

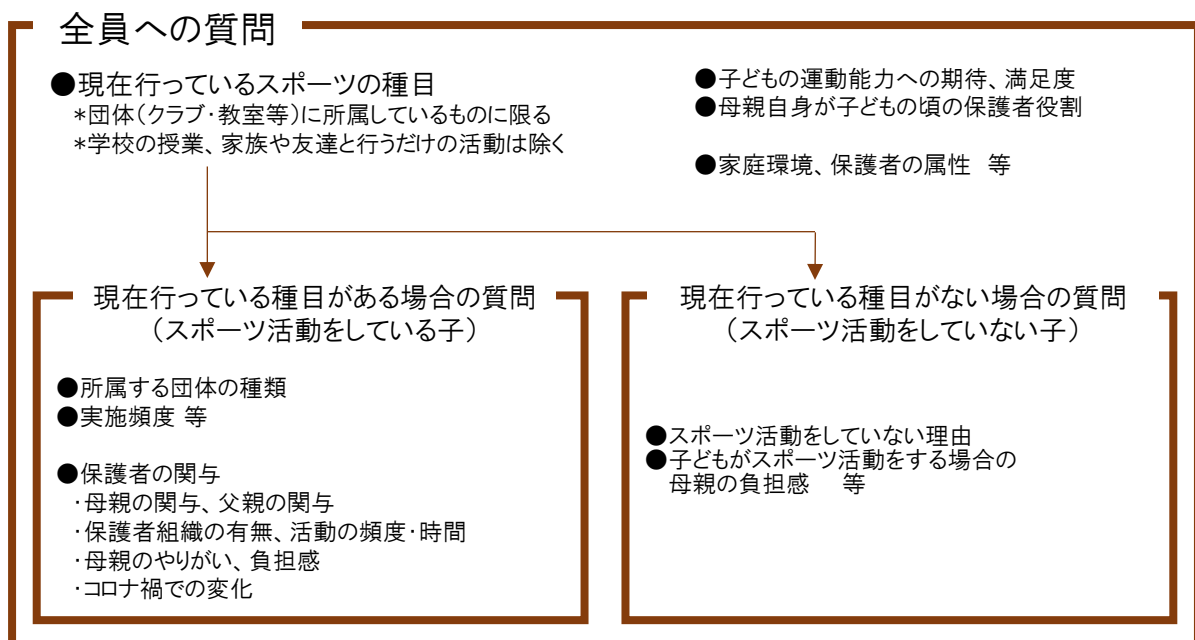
## 1. 2 調査方法・調査対象

調査会社の登録モニターを用いたインターネット調査。小学校1年生～6年生の第1子をもつ母親を対象とし、複数の子どもがいる場合は第1子について回答してもらった。回収にあたっては、対象となる子どもの学年・性別が均等になるよう割付をしている(全学年男女各200名)。有効回答数2,400人。

## 1. 3 調査時期

2021年9月

## 1. 4 主な調査項目



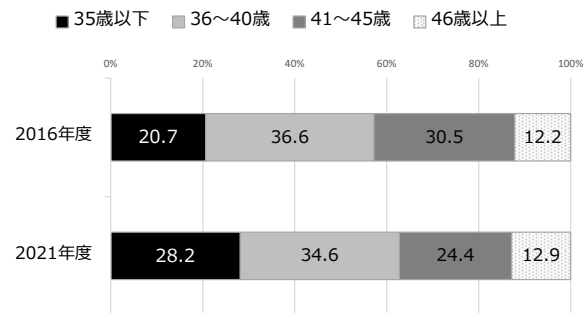
## 1. 5 調査担当

宮本 幸子(笹川スポーツ財団 政策ディレクター)

清水 恵美(笹川スポーツ財団 政策オフィサー)

## 1. 6 基本属性

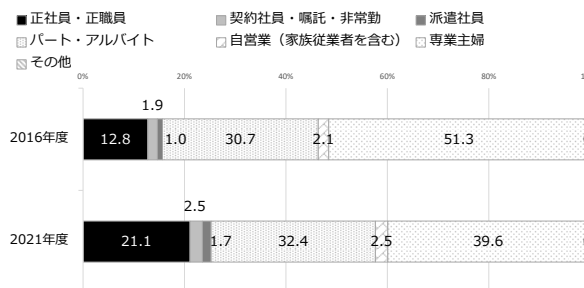
### 母親の年齢



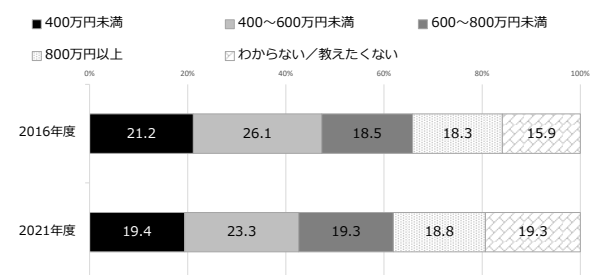
### 子どもの人数



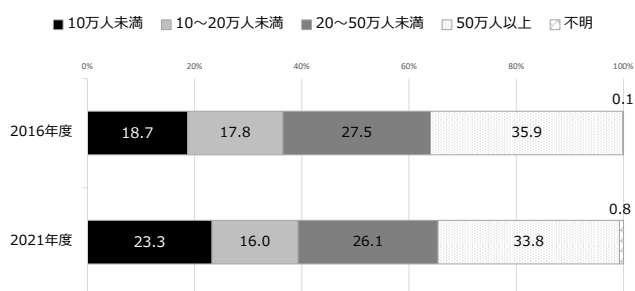
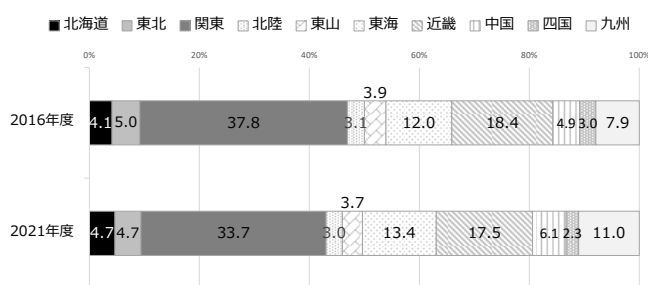
### 母親の就業形態



### 世帯年収



### 居住地区(地域ブロック別、市区町村の人口規模別)



## 1. 7 調査結果を読む上での注意点

- ・図表中の「母親の就業形態別」については、「母親の就業形態(基本属性参照)」のうち、十分なケース数が確保できる「正社員・正職員」「パート・アルバイト」「専業主婦」を分析に使用している。
- ・図表中の「人口規模別」の人口は、居住地(市区町村)の回答をもとにして特定・算出している(総務省「令和3年1月1日住民基本台帳人口・世帯数、令和2年(1月1日から同年12月31日まで)人口動態(市区町村別)(総計)」を使用)。
- ・図表中の「保護者の期待別」「地域クラブ所属別」については、それぞれ「保護者の期待(図表1-5参照)」「所属する団体の種類(図表2-1参照)」の回答結果をもとに分析している。
- ・「生活の優先度(図表3-1参照)」は、内閣府「男女共同参画社会に関する世論調査(令和元年9月調査)」における質問項目を使用している。内閣府調査では「生活の中での、『仕事』、『家庭生活』、地域活動・学習・趣味・付き合いなどの『地域・個人の生活』の優先度についてお伺いします。」とし、「あなたの希望に最も近いもの」と「あなたの現実・現状に最も近いもの」を尋ねている。本調査では後者(現実・現状)のみを尋ね、ケース数が確保できる『家庭生活』を優先している』『仕事』と『家庭生活』をともに優先している』『仕事』を優先している」等を中心に分析した。
- ・表中の数値で5ポイント以上の差がある場合には<>、10ポイント以上の差がある場合には<< >>の記号をつけている。

・本調査は登録モニターを用いたインターネット調査であるため、回答者に偏りがある点には注意が必要である。前ページの基本属性の経年変化は、必ずしも調査年度による社会変化を反映したわけではなく、母集団となるモニターの登録状況の違いが影響している。2016年度のサンプルには人口規模の大きい地域の居住者が多く含まれていたが、2021年度のサンプルではそのような偏りが若干軽減され、公的なデータの分布に近づいている。本報告書における分析では、上記の事情による属性の差異が保護者の関与・意識等の経年変化に与える影響は小さいことを確認し、ウェイト等を用いた補正は行っていない。

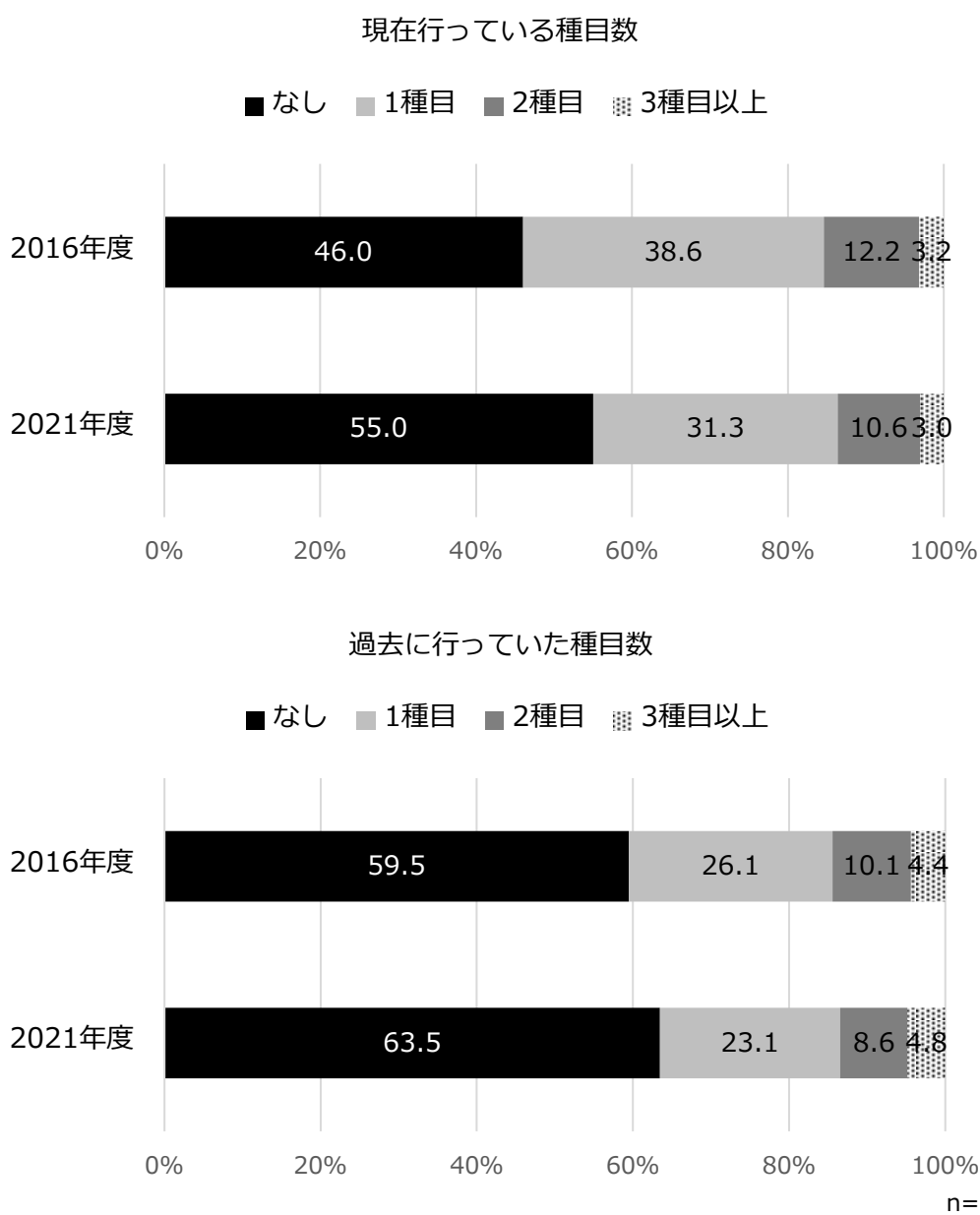
## 2. 調査結果

### 2.1 子どものスポーツ活動

#### (1) 子どものスポーツ活動の種目数

「お子様は小学生になってから、団体(クラブ・教室等)に所属して、以下のようなスポーツ活動を定期的に行ったことがありますか」と尋ね、その回答をもとに、現在行っている種目数および過去(小学生の間)に行っていた種目数を算出した。経年の変化をみると、現在の種目数「なし」が2016年度46.0%から2021年度55.0%へと9.0ポイント増加し、「1種目」は38.6%から31.3%へと減少した(図表1-1)。また、過去に行っていた種目数でも「なし」が59.5%から63.5%へと微増した。

図表 1-1 スポーツ活動の種目数





現在行っている種目数を、性別・世帯年収別・母親の就業形態別・保護者の期待別に分析した(図表1-2)。「なし」の数値に着目すると、性別では男子 48.9% < 女子 61.2%となり、女子のほうがスポーツ活動を行っていない比率が高い。世帯年収別では、400万円未満 69.2%に対して 400～600万円未満 56.1%、600～800万円未満 45.8%、800万円以上 43.1%と差が大きい。笹川スポーツ財団が実施している「子ども・青少年のスポーツライフ・データ」でも世帯年収 600万円を境に習い事の実施状況に違いがみられるという分析結果が出ており(鈴木 2015)、これをおおむね支持する内容となった。

母親の就業形態別に「なし」の数値をみると、正社員・正職員で 45.8%と最も低く、専業主婦で 60.8%と最も高かった。「正社員・正職員」は世帯年収が高い傾向にあるが、その世帯年収をコントロールしても、専業主婦より働く母親の家庭で子どもがスポーツ活動をしている傾向がみられた(図表割愛)。基本属性(p2)では本調査の対象者における就業形態の分布を示したが、スポーツ活動をしている場合に限定して集計しても、母親の約 65%が就業していた。子どものスポーツ活動を考えるにあたっては、現在のこのような家庭の状況を念頭に置く必要がある。

図表1-2で、最後に保護者の期待別にみると、保護者の期待と子どものスポーツ活動の有無には関連があることがわかる。特に母親が「スポーツが下手でも、健康で生活するのに困らない体力があればよい」群では、スポーツ活動「なし」が 72.6%に達した。

図表 1-2 スポーツ活動の種目数(属性別)

|       | 性別        |           | 世帯年収別   |             |             |         |  |  |  |  |
|-------|-----------|-----------|---------|-------------|-------------|---------|--|--|--|--|
|       | 男子        | 女子        | 400万円未満 | 400～600万円未満 | 600～800万円未満 | 800万円以上 |  |  |  |  |
|       | (n=1,200) | (n=1,200) | (n=465) | (n=558)     | (n=463)     | (n=450) |  |  |  |  |
| なし    | 48.9      | 61.2      | 69.2    | 56.1        | 45.8        | 43.1    |  |  |  |  |
| 1種目   | 35.8      | 26.9      | 21.5    | 33.0        | 34.8        | 38.9    |  |  |  |  |
| 2種目   | 12.0      | 9.2       | 7.5     | 9.1         | 14.0        | 14.0    |  |  |  |  |
| 3種目以上 | 3.3       | 2.8       | 1.7     | 1.8         | 5.4         | 4.0     |  |  |  |  |

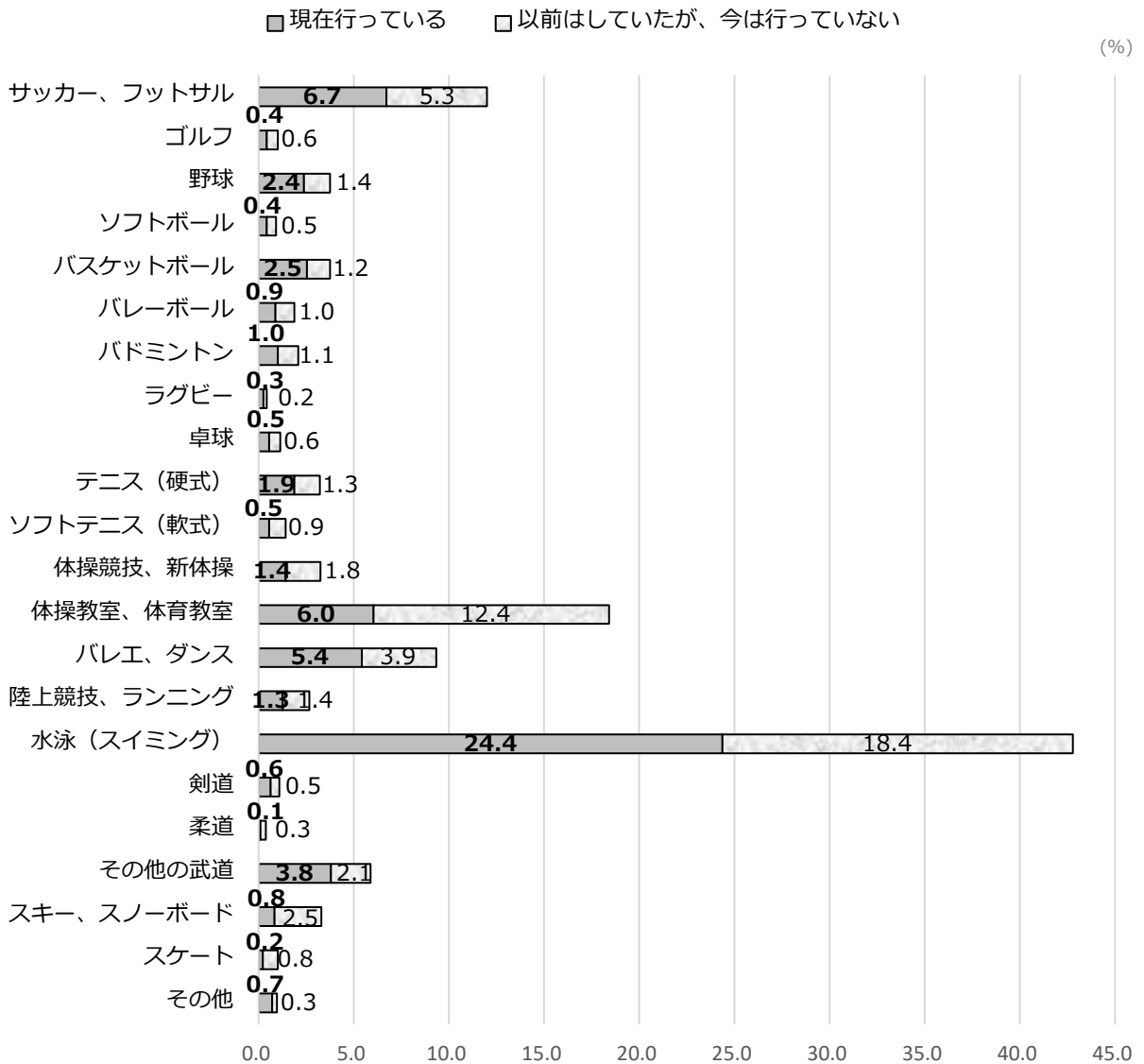
  

|       | 母親の就業形態別      |                 |            | 保護者の期待別            |                |                 |                       |
|-------|---------------|-----------------|------------|--------------------|----------------|-----------------|-----------------------|
|       | 正社員・正職員 (506) | パート・アルバイト (777) | 専業主婦 (950) | トップレベルの選手をめざす (77) | 校内で活躍できる (495) | 人並みにできる (1,138) | 生活に困らなければ下手でもよい (685) |
| なし    | 45.8          | 54.3            | 60.8       | 29.9               | 33.9           | 55.5            | 72.6                  |
| 1種目   | 36.6          | 32.3            | 27.7       | 39.0               | 38.8           | 33.4            | 21.6                  |
| 2種目   | 13.4          | 10.7            | 8.3        | 20.8               | 21.0           | 9.1             | 4.5                   |
| 3種目以上 | 4.2           | 2.7             | 3.2        | 10.4               | 6.3            | 2.0             | 1.3                   |

## (2) 子どもが行っている種目

子どもが行っているスポーツ活動の種目について、図表 1-3 に示した。最も多いのは、2016 年度調査と同じく「水泳(スイミング)」である。今回の調査では「現在行っている」と「以前はしていたが、今は行っていない」を合わせると 42.8%であった。ほか、「サッカー、フットサル」「体操教室、体育教室」「バレエ、ダンス」が多い傾向も前回調査と同様であった。

図表 1-3 子どもが行っている種目



最も多い「水泳(スイミング)」について属性別に分析すると、いくつかの特徴がみられる(図表 1-4)。まず学年別にみると、学年が上がるにつれて「以前はしていたが、今は行っていない」が増加し、「行ったことはない」が減少する。いずれの学年でも2割前後の子どもが活動する一方で、高学年になるにつれてやめていく児童もいる様子がうかがえる。

次に世帯年収別にみると、「行ったことはない」の比率は400万円未満70.8%>800万円以上44.9%と、大きな差がみられる。図表 1-2と同様に、600万円を境に比率が大きく異なっている。

最後に居住地域別にみると、「行ったことはない」の比率は10万人未満63.8%>50万人以上51.6%であった。都市部に高年収層が多い点も影響したと考えられるが、子どもの住む地域によって水泳を習った経験にも差がある点は、スポーツ環境を考える上で重要といえるだろう。

図表 1-4 水泳(スイミング)の状況(学年別、世帯年収別、居住地域別)

(%)

|                   | 学年別          |              |              |              |              |              |
|-------------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|--------------|
|                   | 1年生<br>(400) | 2年生<br>(400) | 3年生<br>(400) | 4年生<br>(400) | 5年生<br>(400) | 6年生<br>(400) |
| 現在行っている           | 25.8         | 27.3         | 26.5         | 27.3         | > 20.3       | 19.3         |
| 以前はしていたが、今は行っていない | 7.3          | 10.8         | 15.3         | 17.3         | < 26.8       | < 33.3       |
| 行ったことはない          | 67.0         | > 62.0       | 58.3         | 55.5         | 53.0         | > 47.5       |

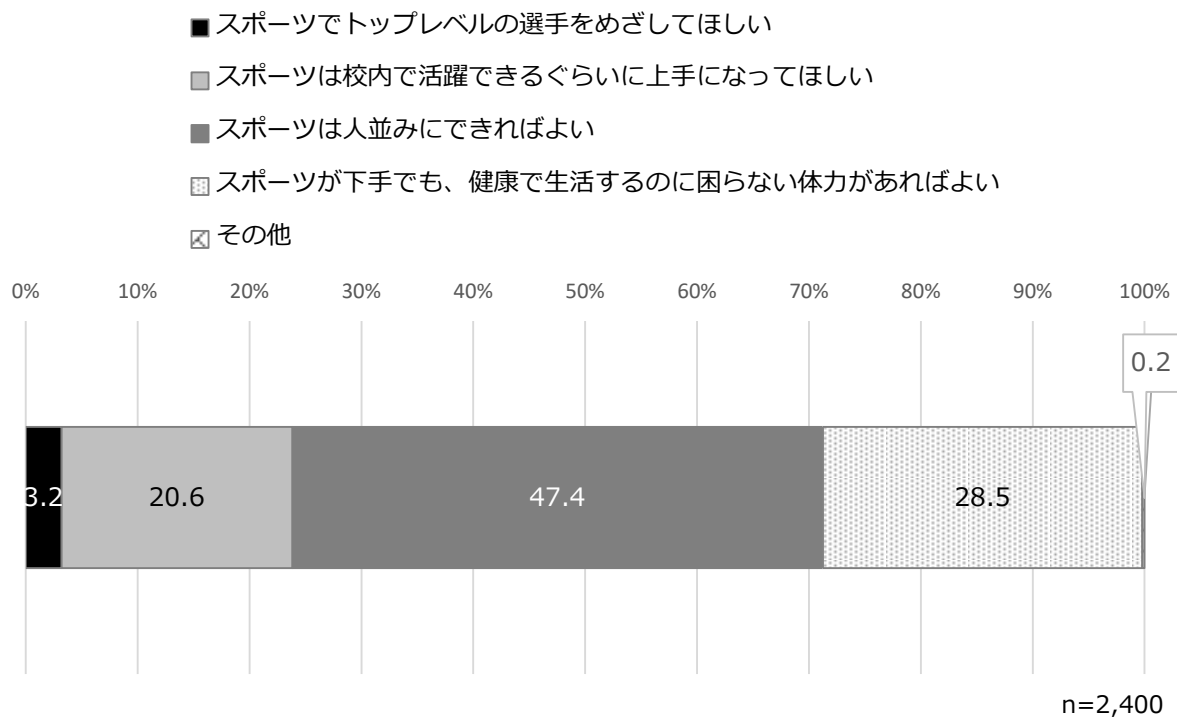
  

|                   | 世帯年収別                |                          |                          |                      | 居住地域別               |                        |                        |                     |
|-------------------|----------------------|--------------------------|--------------------------|----------------------|---------------------|------------------------|------------------------|---------------------|
|                   | 400万円<br>未満<br>(465) | 400~600<br>万円未満<br>(558) | 600~800<br>万円未満<br>(463) | 800万円<br>以上<br>(450) | 10万人<br>未満<br>(558) | 10~20<br>万人未満<br>(385) | 20~50<br>万人未満<br>(627) | 50万人<br>以上<br>(812) |
| 現在行っている           | 16.1                 | < 21.1                   | << 33.0                  | 31.6                 | 21.0                | 23.6                   | 23.3                   | 28.1                |
| 以前はしていたが、今は行っていない | 13.1                 | 17.0                     | 21.4                     | 23.6                 | 15.2                | 15.6                   | < 21.1                 | 20.3                |
| 行ったことはない          | 70.8                 | > 61.8                   | >> 45.6                  | 44.9                 | 63.8                | 60.8                   | > 55.7                 | 51.6                |

### (3) 保護者の期待

「お子様にはどれくらいスポーツができてほしいと思いますか」と4択で尋ねたところ、「スポーツは人並みにできればよい」が最も多く、47.4%であった(図表 1-5)。続いて「スポーツが下手でも、健康で生活するのに困らない体力があればよい」28.5%、「スポーツは校内で活躍できるぐらいに上手になってほしい」20.6%の順に多く、「スポーツでトップレベルの選手をめざしてほしい」は3.2%であった。

図表 1-5 保護者の期待



## 2.2 所属する団体の様子

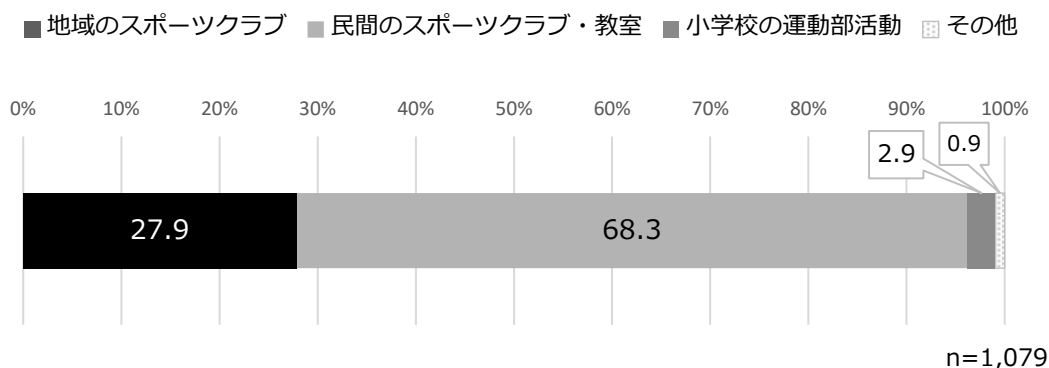
### (1) 所属する団体の種類

子どもがスポーツ活動をしている場合に、所属する団体の種類を尋ねた(図表 2-1)。複数の活動をしている場合には、その後の設問の流れを考慮して「保護者がより熱心に関わっているもの」を尋ねている。全体では「地域のスポーツクラブ」27.9%、「民間のスポーツクラブ・教室」68.3%であった。

属性別にみると、まず性別では男子で「地域のスポーツクラブ」の比率が高い(図表 2-2)。2016 年度調査同様、「地域のスポーツクラブ」には野球・サッカーなど、男子の競技人口が多い種目が含まれる点が影響している。次に居住地域別にみると、「地域のスポーツクラブ」は 10 万人未満 40.6% > 50 万人以上 22.3%であるのに対して、「民間のスポーツクラブ・教室」は 10 万人未満 57.2% < 50 万人以上 74.4%である。都市部において民間クラブの選択肢が充実している一方で、人口規模の小さい地区においては「地域のスポーツクラブ」が子どもたちにスポーツの機会を提供する重要な存在であることがうかがえる。

さらに保護者の期待別にみると、「スポーツでトップレベルの選手をめざしてほしい」と考える保護者の家庭では、他に比べて「地域のスポーツクラブ」の比率が高いことがわかる。

図表 2-1 所属する団体の種類(スポーツ活動をしている子)



図表 2-2 所属する団体の種類(スポーツ活動をしている子・第 1 子性別、居住地域別、保護者の期待別)

|               | 性別          |             | 居住地域別               |                        |                        |                     |
|---------------|-------------|-------------|---------------------|------------------------|------------------------|---------------------|
|               | 男子<br>(613) | 女子<br>(466) | 10万人<br>未満<br>(229) | 10~20万<br>人未満<br>(172) | 20~50万<br>人未満<br>(271) | 50万人<br>以上<br>(399) |
| 地域のスポーツクラブ    | 32.3        | 22.1        | 40.6                | 30.8                   | 23.2                   | 22.3                |
| 民間のスポーツクラブ・教室 | 64.8        | 73.0        | 57.2                | 65.7                   | 70.5                   | 74.4                |
| 小学校の運動部活動     | 2.1         | 3.9         | 1.7                 | 2.3                    | 5.5                    | 2.0                 |
| その他           | 0.8         | 1.1         | 0.4                 | 1.2                    | 0.7                    | 1.3                 |

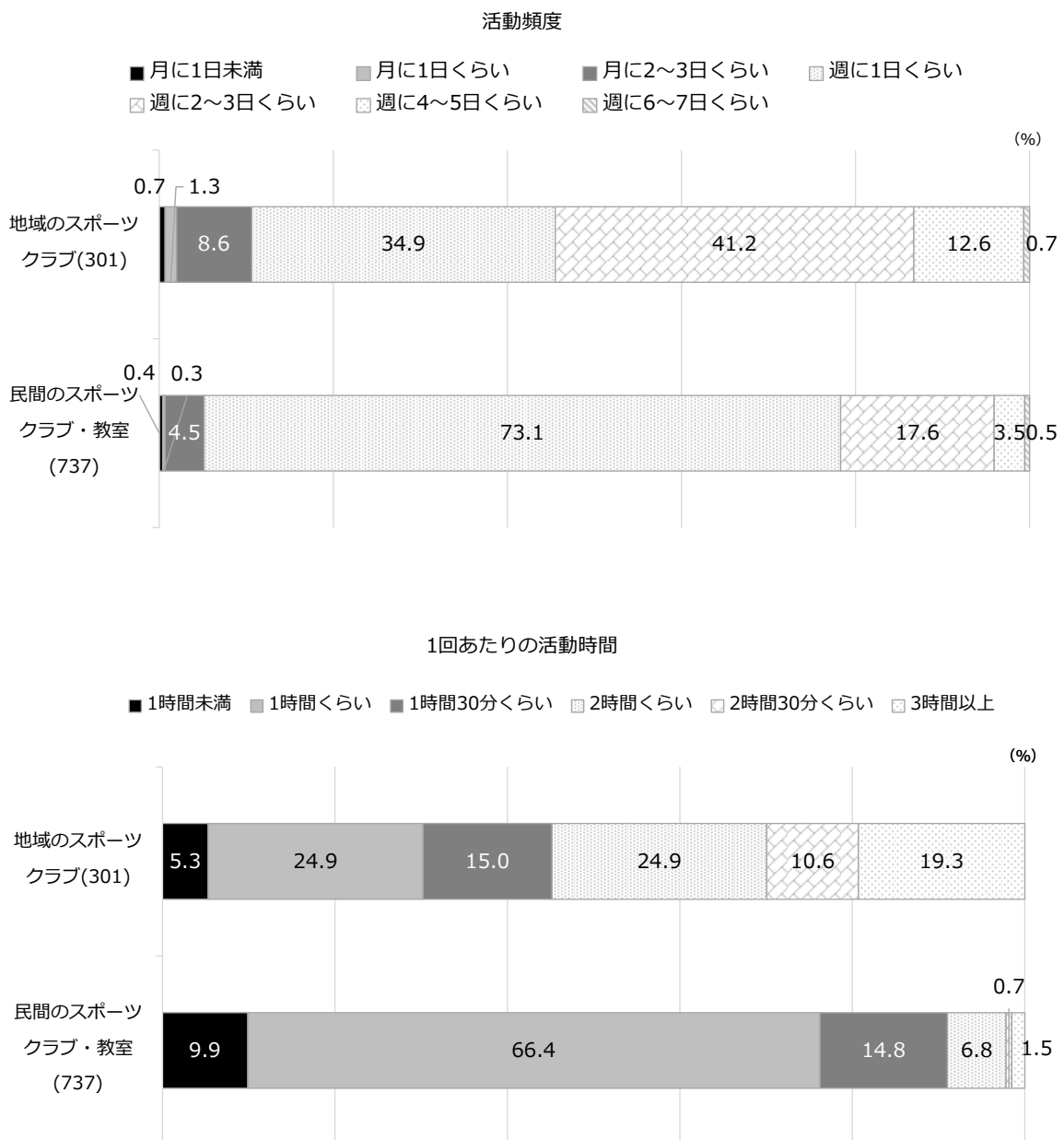
|               | 保護者の期待別                   |                   |                      |                                 |
|---------------|---------------------------|-------------------|----------------------|---------------------------------|
|               | トップレベルの選手を<br>めざす<br>(54) | 校内で活躍できる<br>(327) | 人並みに<br>できる<br>(506) | 生活するのに困らなけれ<br>ば下手でもよい<br>(188) |
| 地域のスポーツクラブ    | 57.4                      | 32.1              | 24.3                 | 22.3                            |
| 民間のスポーツクラブ・教室 | 40.7                      | 65.4              | 72.3                 | 70.7                            |
| 小学校の運動部活動     | 1.9                       | 1.8               | 2.2                  | 6.4                             |
| その他           | 0.0                       | 0.6               | 1.2                  | 0.5                             |

## (2) 所属する団体の活動状況

地域クラブと民間のクラブでは、活動状況に差がみられる。図表 2-3 では所属する団体別に、活動の頻度と 1 回あたりの時間を示した。活動頻度をみると、地域のスポーツクラブでは「週に 1 日くらい」34.9%、「週に 2～3 日くらい」41.2%、「週に 4～5 日くらい」12.6%と、頻度の高いクラブが多い。対して民間のスポーツクラブでは「週に 1 日くらい」が 73.1%と大半を占めている。

1 回あたりの時間も同様の傾向がみられ、民間のスポーツクラブでは「1 時間くらい」が 66.4%であるのに対して地域のスポーツクラブでは 24.9%にとどまる。地域のクラブでは「2 時間くらい」24.9%、「2 時間 30 分くらい」10.6%、「3 時間以上」19.3%と、全体的に長時間となっている。

図表 2-3 所属する団体の活動頻度・時間(スポーツ活動をしている子・団体の種類別)



### (3) コロナ禍の活動状況の変化

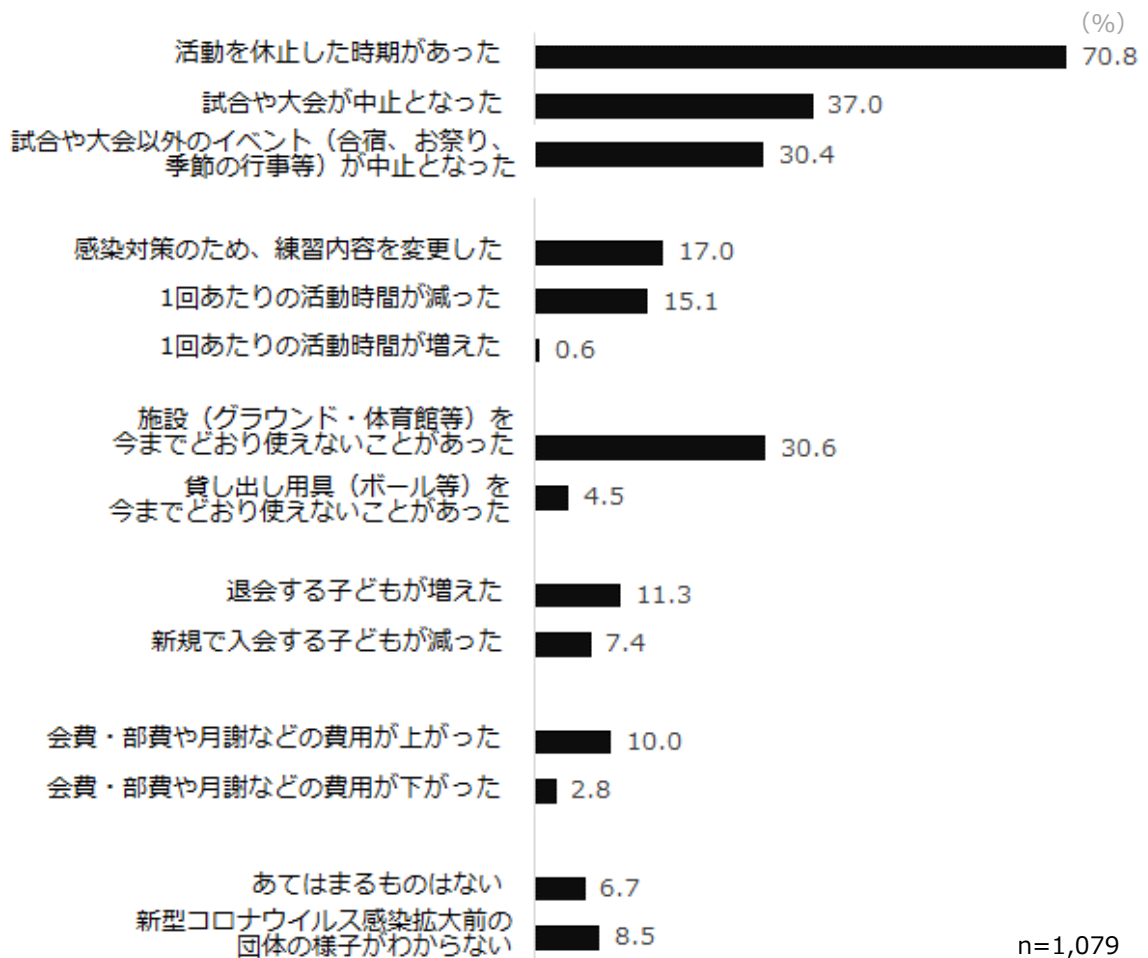
子どもがスポーツ活動を行っている母親に対して、所属する団体(クラブ・教室等)における新型コロナウイルス感染拡大以降(2020年3月以降)の変化を尋ねた(図表2-4)。

「あてはまるものはない」6.7%と「新型コロナウイルス感染拡大前の団体の様子がわからない」8.5%を除いた計84.8%が、新型コロナウイルスの影響を受けたと認識している。数値が高いのは活動の休止・中止に関する内容で、「活動を休止した時期があった」は70.8%に達した。ほかにも「試合や大会が中止となった」37.0%、「試合や大会以外のイベント(合宿、お祭り、季節の行事等)が中止となった」30.4%と、保護者が付き添いや運営の補助をする機会の減少につながった可能性がある。

「退会する子どもが増えた」は11.3%、「新規で入会する子どもが減った」は7.4%で、いずれか片方でも選択した母親は15.1%であった。活動の一時的な休止・中止を経験した団体と比べると、活動する子どもの数が減った団体はそれほど多くなかったといえよう。

他の項目では「施設を今までどおり使えないことがあった」が30.6%、「感染対策のため、練習内容を変更した」が17.0%であった。団体によっては、活動場所の確保や練習内容の変更により、日頃の練習においても新型コロナウイルスの影響がみられた。

図表2-4 コロナ禍での変化①(スポーツ活動をしている子)

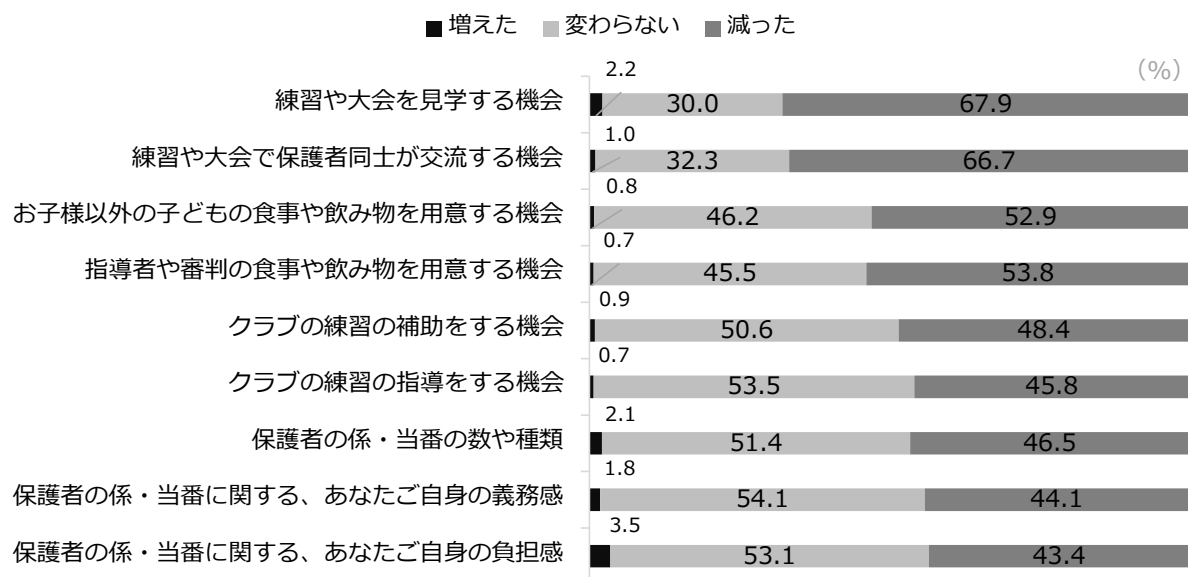


注)複数回答。

同じく子どもがスポーツ活動を行っている母親に対して、所属する団体(クラブ・教室等)における保護者の役割を中心に、新型コロナウイルス感染拡大以降(2020年3月以降)の増減を尋ねた(図表2-5)。なお、「コロナ以前から存在しない」「わからない」を除外して集計しているため、項目によってケース数は異なる。

グラフをみると、いずれの項目でも「増えた」はごく少数である。特に「練習や大会を見学する機会」では「減った」が67.9%と6割を超えた。また、「練習や大会で保護者同士が交流する機会」も、「変わらない」32.3%に対して「減った」は66.7%であった。感染対策の結果、スポーツ活動において子どもの成長を感じたり親どうしのつながりを築いたりする機会が失われた保護者が一定数いることが推察される。「係・当番の数や種類」も「変わらない」51.4%、「減った」46.5%となり、コロナ前後の様子を認識している母親たちの約半数が減ったと回答している。保護者の係や当番に対する「義務感」や「負担感」も、「変わらない」が約半数、「減った」が約45%となり、同様の傾向である。コロナ禍が係・当番の内容を精査する機会となった可能性もあり、平時に戻った時にどのような動向となるか注目される。

図表 2-5 コロナ禍での変化②(スポーツ活動をしている子)

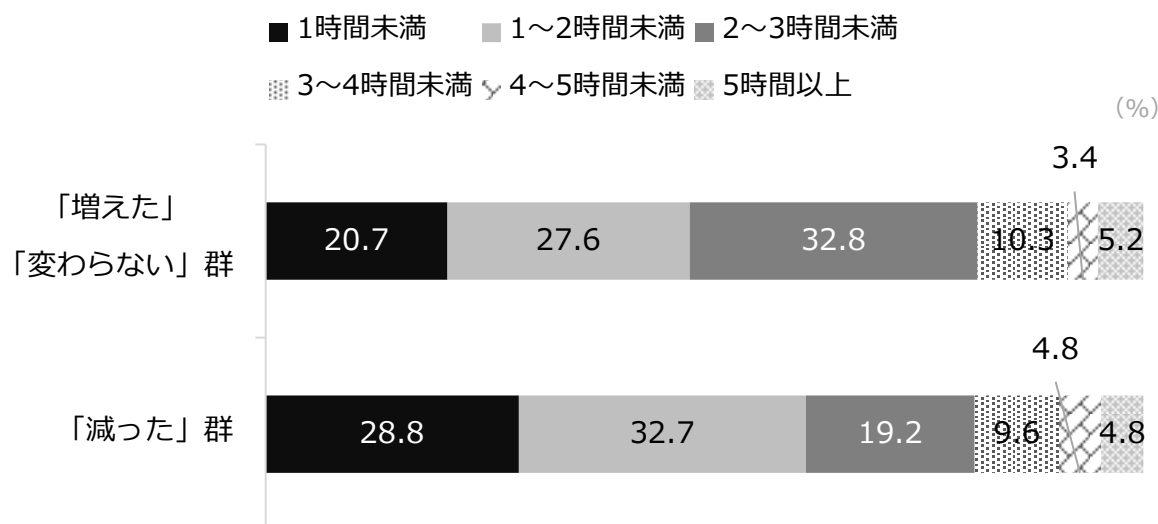


注)子どもがスポーツ活動をしている母親(n=1,079)が回答。各項目「コロナ以前から存在しない」「わからない」を除いて集計している。



また、図表 2-5 のうち「練習や大会を見学する機会」が「増えた」「変わらない」と回答した群と「減った」と回答した群にわけて比較した。係・当番の 1 回あたりの時間をみると、2 時間未満（「1 時間未満」「1～2 時間未満」の合計）の割合が「減った」群 61.5%に対して、「増えた」「変わらない」群は 48.3%であった（図表 2-6）。「減った」群で保護者の活動時間が短いことがわかる。係・当番の活動頻度（日数）には差はみられなかった（図表割愛）。

図表 2-6 保護者組織や当番等の 1 回あたりの時間（コロナ禍の変化別）



次に、それぞれの群が、子どものスポーツ活動において担っている役割の個数と、その役割についてやりがいや負担を感じていると回答した項目数を、図表 2-7 に示した。その結果、担っている役割の数、やりがいや負担感いずれも大きな差はなく、当番や係を担当することの多い「練習や大会を見学する機会」が減ったとしても、母親の負担感の軽減ややりがいにつながるとはいえない結果であった。

図表 2-7 1 人あたりのやりがいと負担感を感じる平均項目数(個)

|               | 「増えた」「変わらない」群 |     | 「減った」群 |     |
|---------------|---------------|-----|--------|-----|
|               | n             | 個数  | n      | 個数  |
| 担っている役割（全19個） | 266           | 8.2 | 562    | 7.9 |
| やりがい（全19個）    | 265           | 5.5 | 562    | 5.2 |
| 負担感（全21個）     | 266           | 3.9 | 562    | 3.4 |

注 1) やりがいは、「とてもやりがいを感じている」+「まあやりがいを感じている」と回答した個数の平均値。

注 2) 負担は、「とても負担に感じている」+「やや負担に感じている」と回答した個数の平均値。

注 3) 役割の内容については図表 3-3-3-4 を参照。

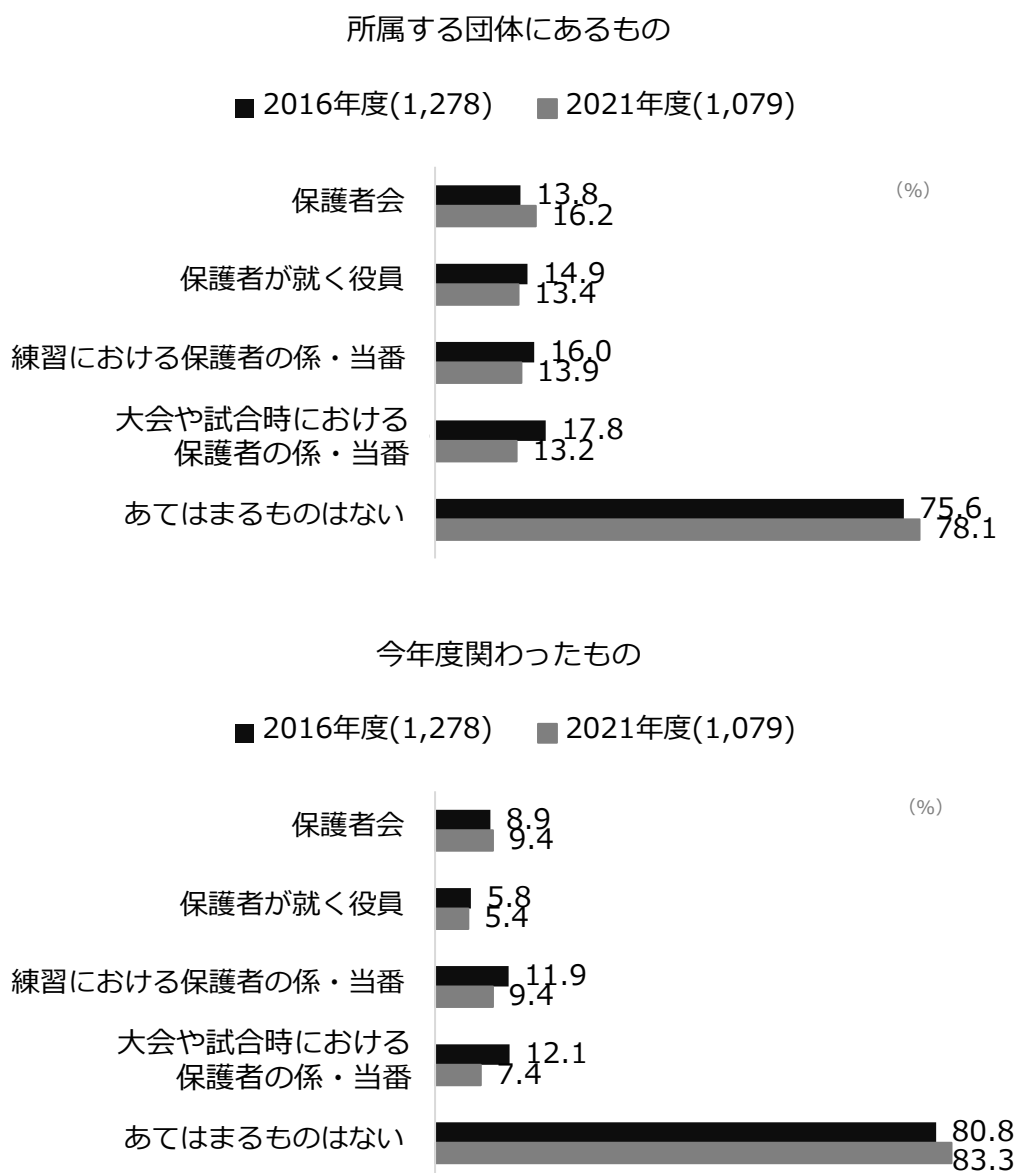
母親が実際に子どものスポーツ活動をみる機会が練習や大会が主となるが、上記のように、その機会が減り、保護者会や役員、係・当番の時間が短くても、母親の負担感の軽減には直接つながらないことが推察される。

#### (4) 所属する団体の保護者組織

子どもが所属する団体にある保護者組織と、そのうち調査年度に母親自身が関わったものを、それぞれ複数回答で選んでもらった(図表 2-8)。「大会や試合時における保護者の係・当番」はいずれも 2016 年度から 2021 年度にかけて減少し、特に母親自身が関わった比率は 2016 年度 12.1%、2021 年度 7.4% となった。

ほかには経年での大きな変化はみられず、所属する団体に該当する組織・役割が「ない」のは 78.1%、母親自身が何も関わっていない比率は 83.3%であった。前項と合わせて解釈すると、コロナ以前から保護者の組織や役割があった団体ではそれらを継続させ、その中での活動時間等が減少したと考えられる。

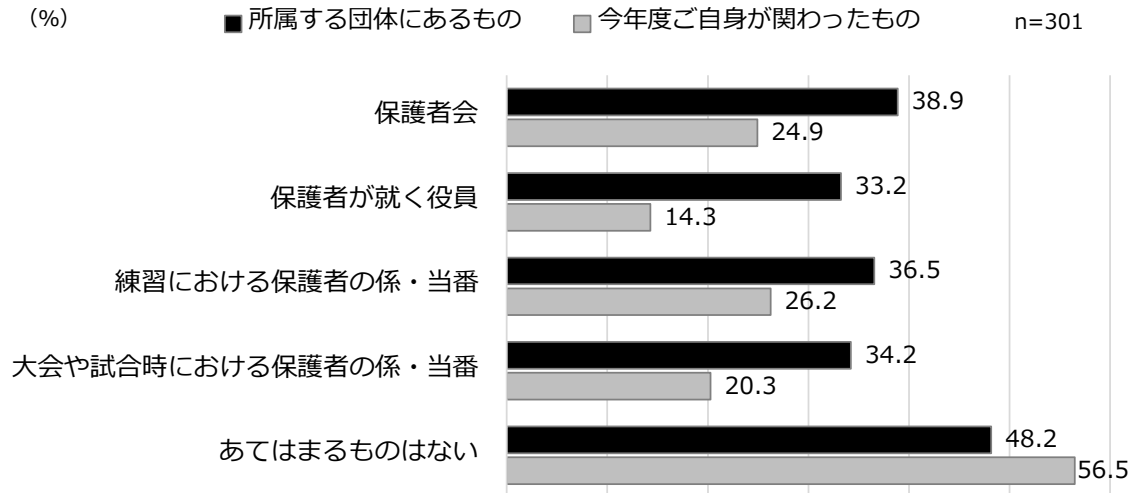
図表 2-8 所属する団体の保護者組織(スポーツ活動をしている子)



注)複数回答。

また、同じ項目を地域のスポーツクラブに所属する場合のみに絞って集計したのが、図表 2-9 である。4 項目いずれも 3~4 割が「所属する団体にある」と回答し、「練習における係・当番」は 26.2%、「大会や試合時における係・当番」は 20.3%、「保護者が就く役員」は 14.3%が、「今年度自身が関わった」としている。保護者の組織も母親たちの関与も、地域クラブではより多いことがわかる。

図表 2-9 所属する団体の保護者組織(スポーツ活動をしている子・地域クラブのみ)



注)複数回答。

保護者の組織や係・当番に関わった母親に、それらの活動の頻度・時間や、引き受けた時の気持ちについて尋ねた。

まずは係や当番の頻度・時間を検討するが、先んじて保護者組織等の有無別に、団体の活動(=普段の練習等)頻度・時間の差をみておきたい(図表 2-10)。保護者組織等のない場合は、団体の活動頻度は「週に1日くらい」が72.1%と最も多く、次いで「週に2~3日くらい」17.8%である。対して保護者組織等がある場合の団体の活動頻度は、「週に1日くらい」21.2%、「週に2~3日くらい」48.3%、「週に4~5日くらい」19.5%となっている。

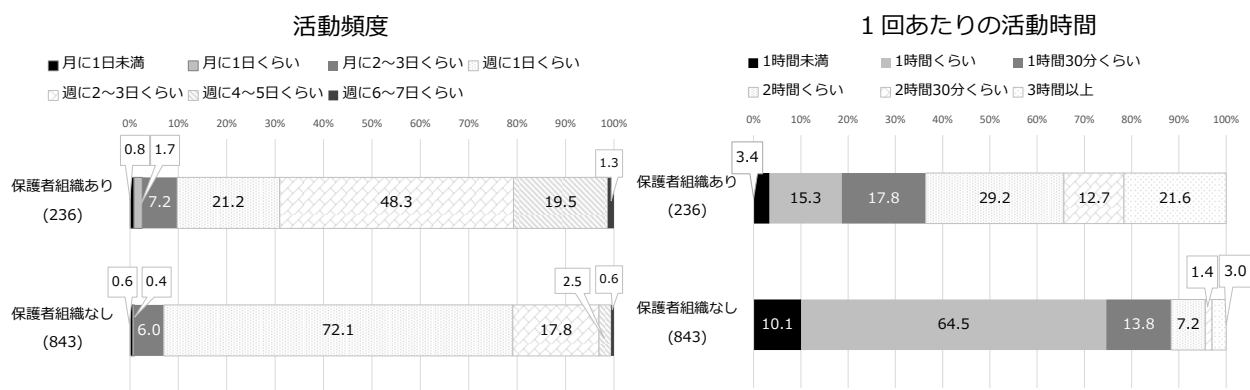
活動時間にも違いがみられ、保護者組織等のない場合では1回あたり「1時間くらい」が64.5%と大半を占めるのに対して、保護者組織等のある場合では分布が散らばり、「3時間以上」が21.6%に達している。このように、そもそも保護者組織等のある場合には、団体そのものの活動頻度が高く、1回あたりの時間が長い傾向にあることがわかる。

それでは、母親自身が保護者の組織や係・当番に関わった頻度・時間を確認したい(図表 2-11)。頻度をみると、「2~3カ月に1日未満」から「月に2~3日くらい」までの合計が92.7%で、団体の活動頻度に比べると少ない傾向にある。これは、大半の母親は自分の係や当番の日、大会や試合の日のみに帯同するためと考えられる。一方で「週に1日」以上活動する母親(「週に1日くらい」~「週に4~5日以上」の合計)が7.2%と、少数ではあるものの高い頻度で団体をサポートしている母親もいることがわかる。

母親の活動時間に着目すると、「1時間未満」27.8%、「1~2時間未満」31.1%と比較的短時間の群もいる一方で、「3時間以上」(「3~4時間未満」~「5時間以上」の合計)が19.4%となっている。一部の母親は、クラブの活動時間に合わせて長時間のサポートを行っていることが推察される。

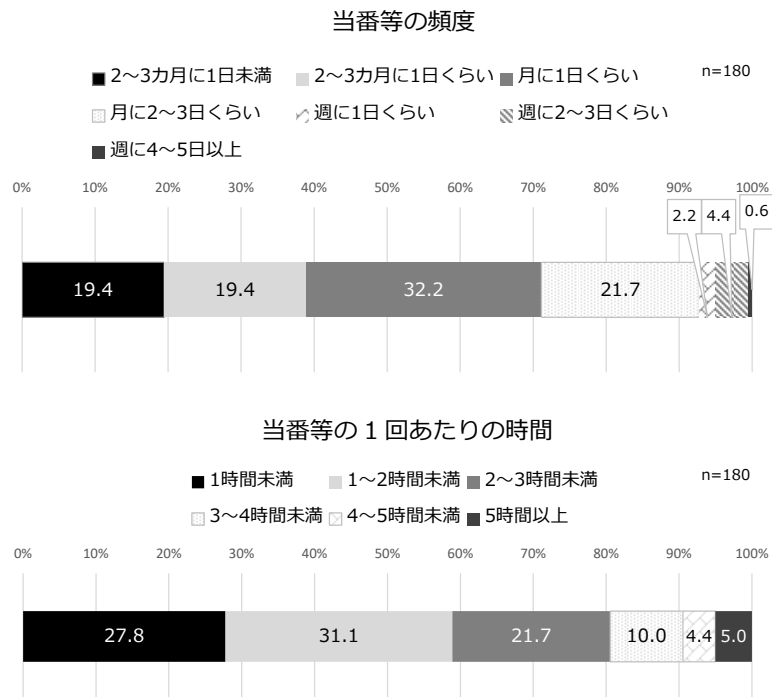
また、引き受けた時の気持ちを3択で尋ねたところ、「保護者会」「練習における保護者の係・当番」「大会や試合時における保護者の係・当番」の3項目では、「積極的ではないが、やってもいいとは思っていた」が多数派で5割前後を占めていた(図表 2-12)。「ぜひやりたいと思っていた」という積極的な層は1割前後である。「保護者が就く役員」では、最も多いのは「できればやりたくないと思っていた」46.6%であった。

図表 2-10 所属する団体の活動頻度・時間(スポーツ活動をしている子・保護者組織の有無別)



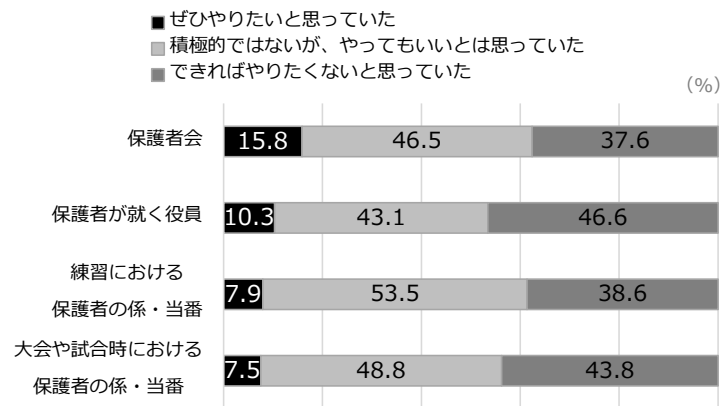
注) 所属する団体に図表 2-8 の4項目のうちいずれか1つでもある場合を「保護者組織あり」、1つもない場合を「保護者組織なし」と区分している。

図表 2-11 保護者組織や当番等の頻度・時間(スポーツ活動をしている子)



注)今年度、保護者の組織(図表 2-8 参照)に関わっている母親のみに尋ねている。

図表 2-12 当番等を引き受けた時の気持ち(スポーツ活動をしている子)



注)各項目、現在関わっている人を母数にして集計している。

### (5) コロナ禍の係・当番の変化

所属する団体に保護者の組織、係や当番がある場合に、「保護者の係や当番で、コロナ禍で新たに行っていること/やめたこと」を自由記述で回答してもらった。「新たに行っていること」は具体的に記述があった99件のほぼすべてが、消毒・検温等の「コロナ対策」であった。

「やめたこと」に対しては76件の具体的な記述があった。図表 2-13 には同様の回答が複数みられた内容をまとめている。最も多かったのは飲食物の提供、保冷剤などの共有、掃除といったコロナ対策に関連する内容であった。また、試合や合宿、練習など活動そのものの減少により、保護者の係や当番、付き添いもなくなったとする声もあがっていた。ほかには、保護者どうしの交流の場である親睦会や懇親会、それに伴う準備がなくなったという記述もみられた。

図表 2-13 コロナ禍の係・当番の変化

| カテゴリー     | 回答                      |
|-----------|-------------------------|
| コロナ対策     | お茶出し                    |
|           | コーチへの差し入れ・弁当提供          |
|           | 飲み物の共有・提供               |
|           | 試合での飲み物当番               |
|           | 熱中症対策で氷や保冷剤など共有できなくなった。 |
| 活動の減少     | 床掃除・雑巾がけ                |
|           | 試合                      |
|           | 大会や集会                   |
|           | 合宿                      |
| 保護者の交流の減少 | 集団での練習                  |
|           | 見学                      |
|           | 親同士が会うこと                |
|           | 親睦会・懇親会                 |

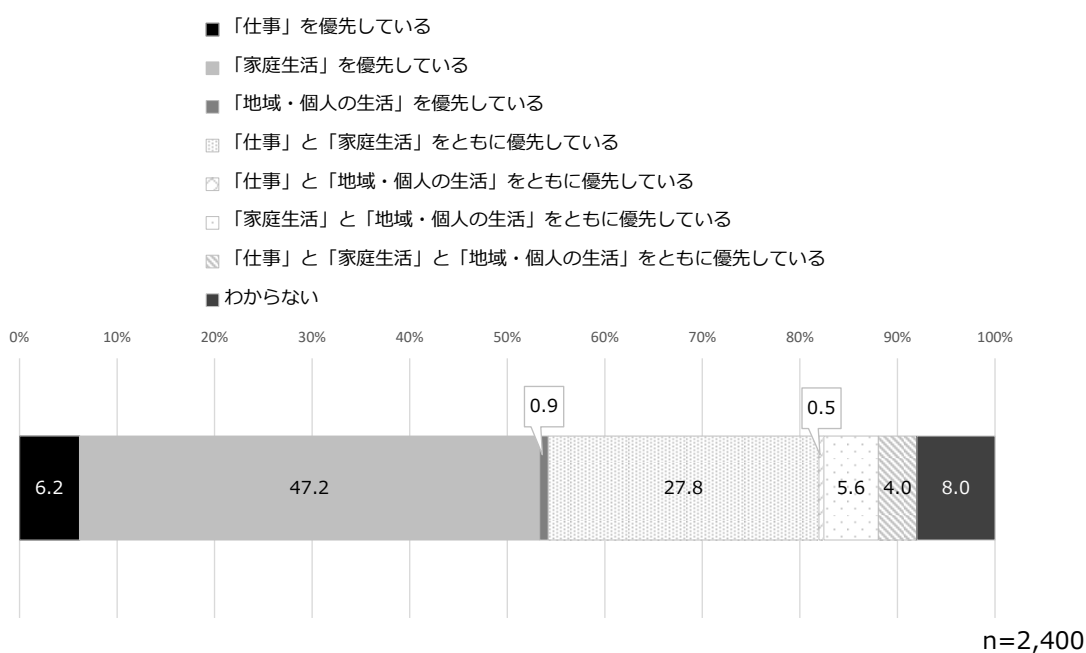
注)表記・表現は基本的に原文(回答)のまま引用している。

## 2.3 保護者の役割

### (1) 母親の生活の優先度

今回、新規の項目で母親に対して「生活の優先度」を尋ねた(詳細は p3 参照)。図表 3-1 をみると、最も多いのは「『家庭生活』を優先している」47.2%であった。次いで「『仕事』と『家庭生活』をともに優先している」27.8%が続く。その他はいずれも 10%未満で、「『地域・個人の生活』を優先している」「『仕事』と『地域・個人の生活』をともに優先している」は 1%未満と、特に少なかった。

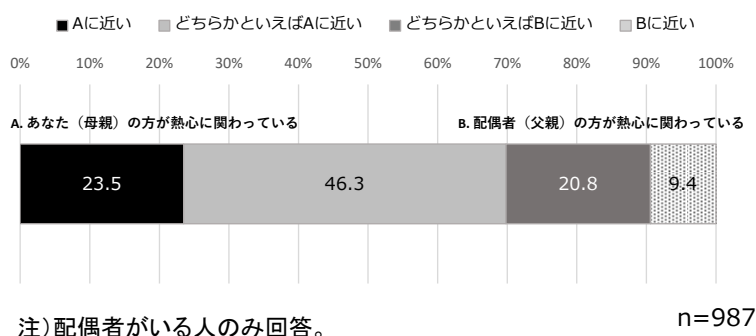
図表 3-1 生活の優先度



### (2) 家庭内の様子

スポーツ活動をしている子どもの母親に対して、家庭内の様子を尋ねた。家庭内では「A.母親の方が熱心に関わっている(A に近い+どちらかといえば A に近い)」が合わせて 69.8%、「B.父親の方が熱心に関わっている(B に近い+どちらかといえば B に近い)」が 30.2%であった(図表 3-2)。子どものスポーツ活動に対しては、母親が中心に関与している家庭が多いことがわかる。なお、世帯年収別・母親の就業形態別などで差はみられなかった(図表割愛)。

図表 3-2 家庭内の様子(スポーツ活動をしている子)

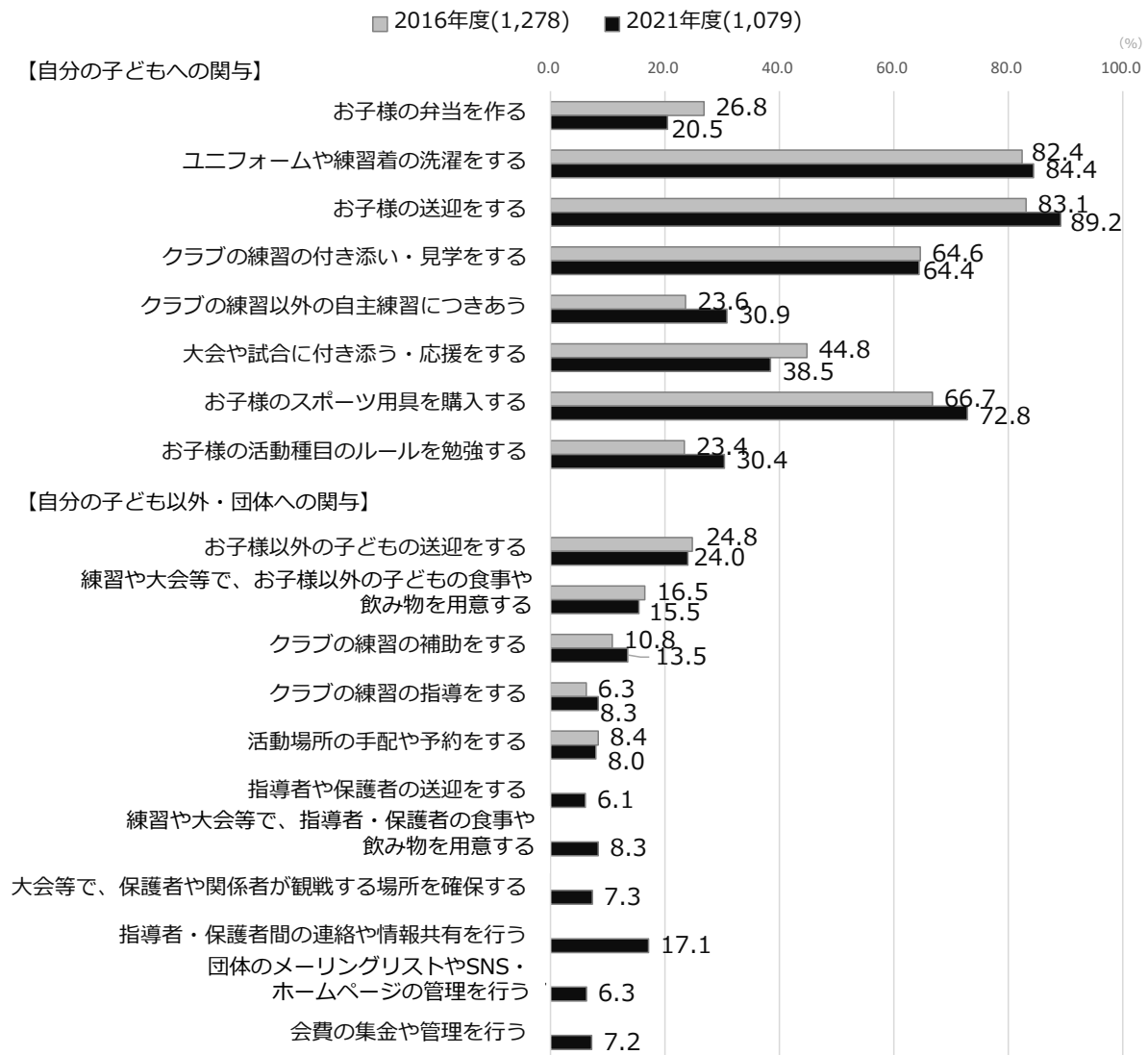


### (3) 母親の関与・父親の関与

子どものスポーツ活動に対する、母親・父親の関与の実態を尋ねた。図表 3-3 が母親の関与、図表 3-4 が父親の関与である。経年変化に着目すると、母親・父親ともに「お子様の送迎をする」が増加し、「大会や試合に付き添う・応援をする」が減少するという共通の傾向がみられる。母親ではほかに、「クラブの練習以外の自主練習につきあう」「スポーツ用具を購入する」「活動種目のルールを勉強する」が増加、「弁当を作る」が減少していた。前節でみたように、コロナ禍で長時間の活動や大会・イベントなどが難しくなり、弁当を作ったり大会や試合を応援したりする機会は減少したと考えられる。一方で、自主練習・ルールの勉強など、自分の子どもに直接かかわる行動は増えている。団体の活動が思うようにできない中で、個々の保護者が子どものスポーツ活動継続のために尽力していた様子が見えてくる。

また、今回の調査では団体全体に関わる活動について新しく項目を追加した(2017年に実施したグル

図表 3-3 母親の関与(スポーツ活動をしている子)



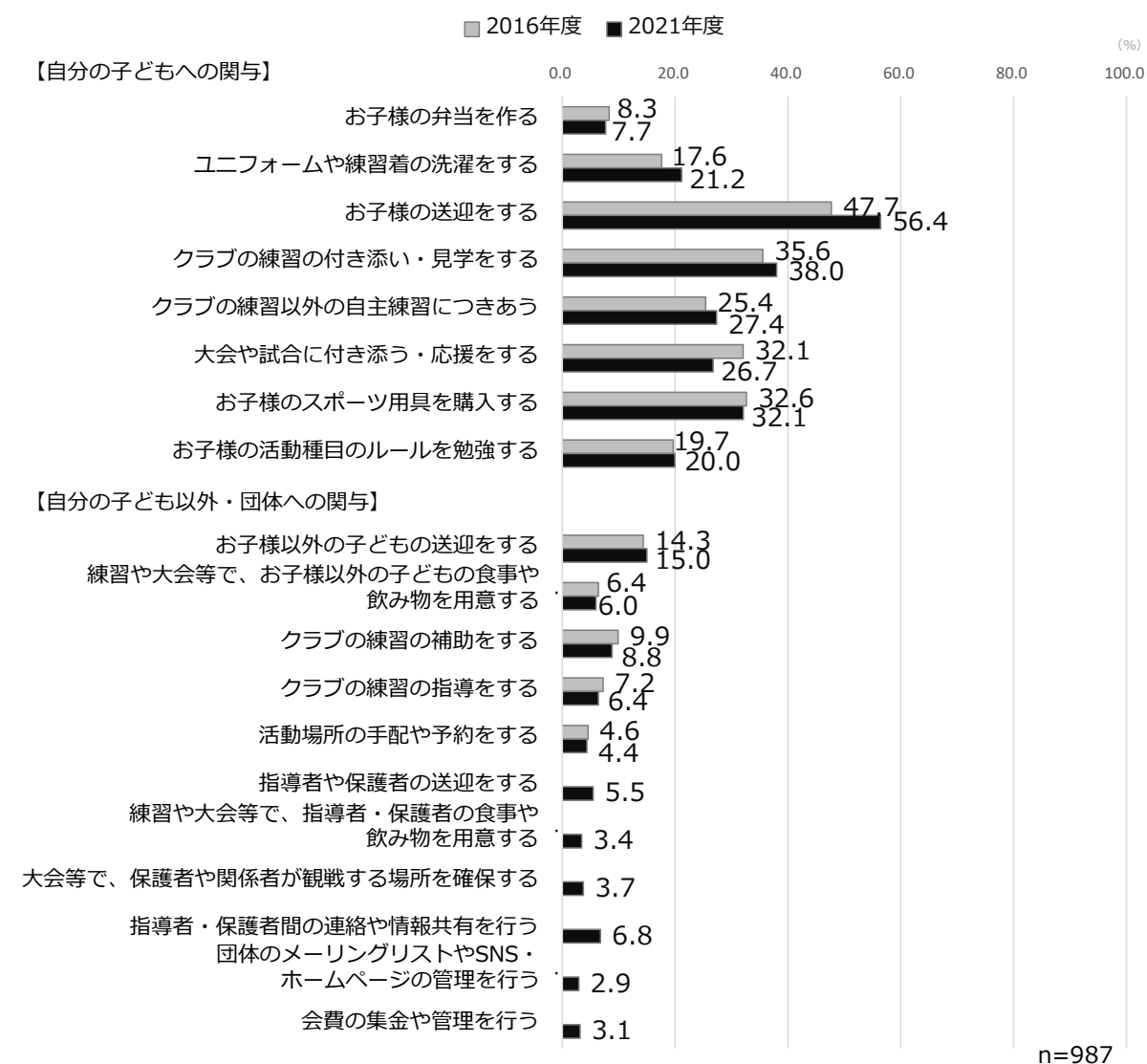
注)「よくする」+「時々する」の%。



ープインタビューで、役員などを務めている母親から聞かれた内容を参考に設定した)。数値をみると、「指導者・保護者間の連絡や情報共有を行う」では母親 17.1%>父親 6.8%と、10 ポイント以上の差があった。「指導者・保護者の食事や飲み物を用意する」「大会等で、保護者や関係者が観戦する場所を確保する」「団体のメーリングリストや SNS・ホームページの管理を行う」「会費の集金や管理を行う」の 4 項目は、いずれも母親が 6~8%程度、父親が 2~4%程度であった。また、「クラブの練習の指導をする」(母親 8.3%、父親 6.4%)「指導者や保護者の送迎をする」(同 6.1%、5.5%)については、母親と父親でほとんど差はみられなかった。

一方で、「ユニフォームや練習着の洗濯をする」では約 60 ポイント、「お子様のスポーツ用具を購入する」では約 40 ポイント、「お子様の送迎をする」「クラブの練習の付き添い・見学をする」では約 30 ポイント、「お子様以外の子どもの送迎をする」「お子様以外の子どもの食事や飲み物を用意する」では約 10 ポイント、母親が父親の数値を上回る。全体的に母親中心に関与している様子は前回と変わらなかった。

図表 3-4 父親の関与(スポーツ活動をしている子)



注 1)「よくする」+「時々する」の%。

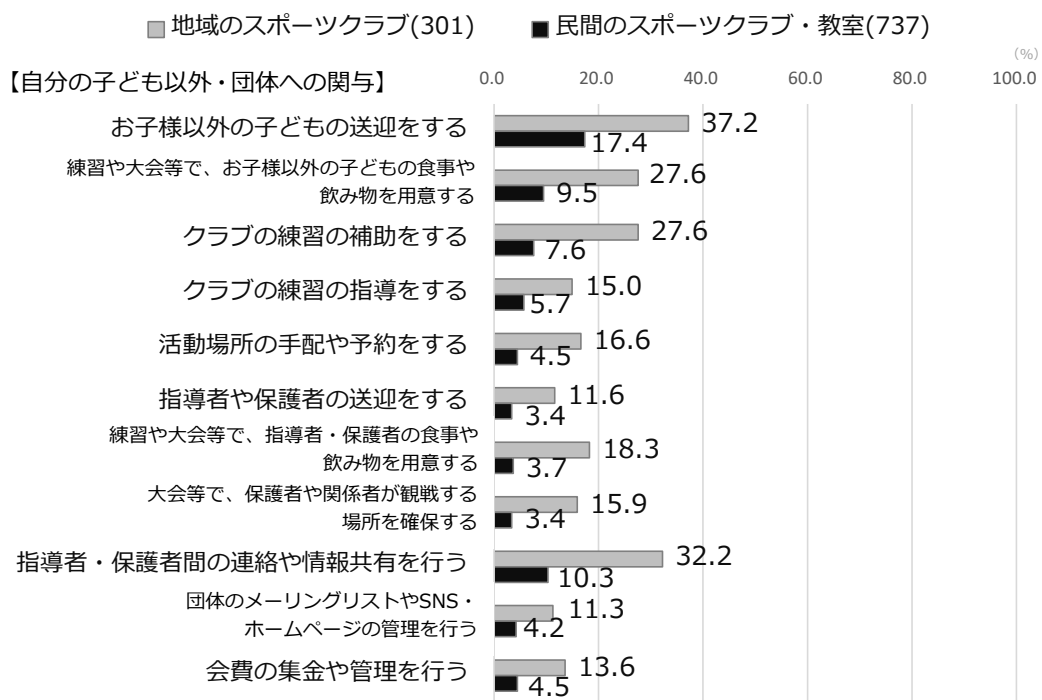
注 2) 配偶者がいる人のみ回答。

図表 3-5、3-6 は、母親の関与・父親の関与のうち、「自分の子ども以外・団体への関与」について、所属する団体の種類別にみた結果である。図をみると全体的に「地域のスポーツクラブ」で数値が高く、母親(図表 3-5)では「お子様以外の子どもの送迎」37.2%、「指導者・保護者間の連絡や情報共有」32.2%、「お子様以外の子どもの食事や飲み物を用意」「クラブの練習の補助」27.6%など、3~4 割が関与している内容もある。

父親(図表 3-6)でも同様に「地域のスポーツクラブ」で数値が高く、「お子様以外の子どもの送迎」22.9%、「クラブの練習の補助」23.2%では、2 割以上が関わっている。

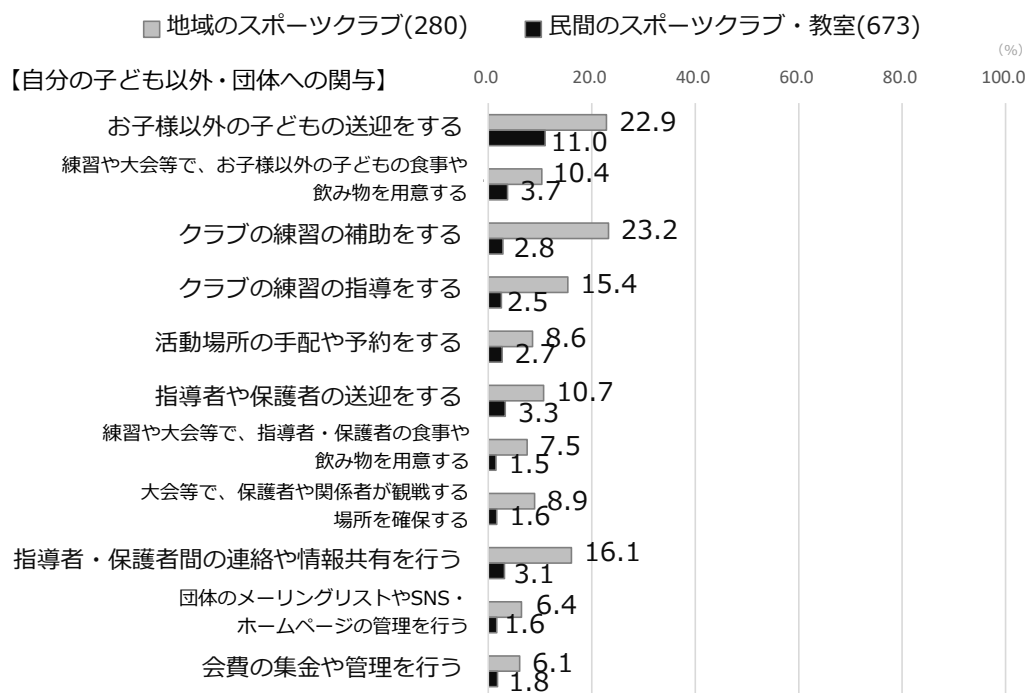
「地域のスポーツクラブ」に絞って母親と父親の差をみると、「クラブの練習の指導」(母親 15.0%、父親 15.4%、以下同)「指導者や保護者の送迎」(11.6%、10.7%)は差が非常に小さく、反対に「お子様以外の子どもの送迎」(37.2% > 22.9%)、「お子様以外の子どもの食事や飲み物を用意」(27.6% > 10.4%)、「指導者・保護者の食事や飲み物を用意」(18.3% > 7.5%)、「指導者・保護者間の連絡や情報共有」(32.2% > 16.1%)は、母親が父親より 10 ポイント以上高い。全体の傾向と同じく、子どもたちのケアにあたる役割は、母親が多く担っていることがわかる。

図表 3-5 母親の関与(スポーツ活動をしている子、所属する団体の種類別)



注)「よくする」+「時々する」の%。

図表 3-6 父親の関与(スポーツ活動をしている子・所属する団体の種類別)



注 1)「よくする」+「時々する」の%。

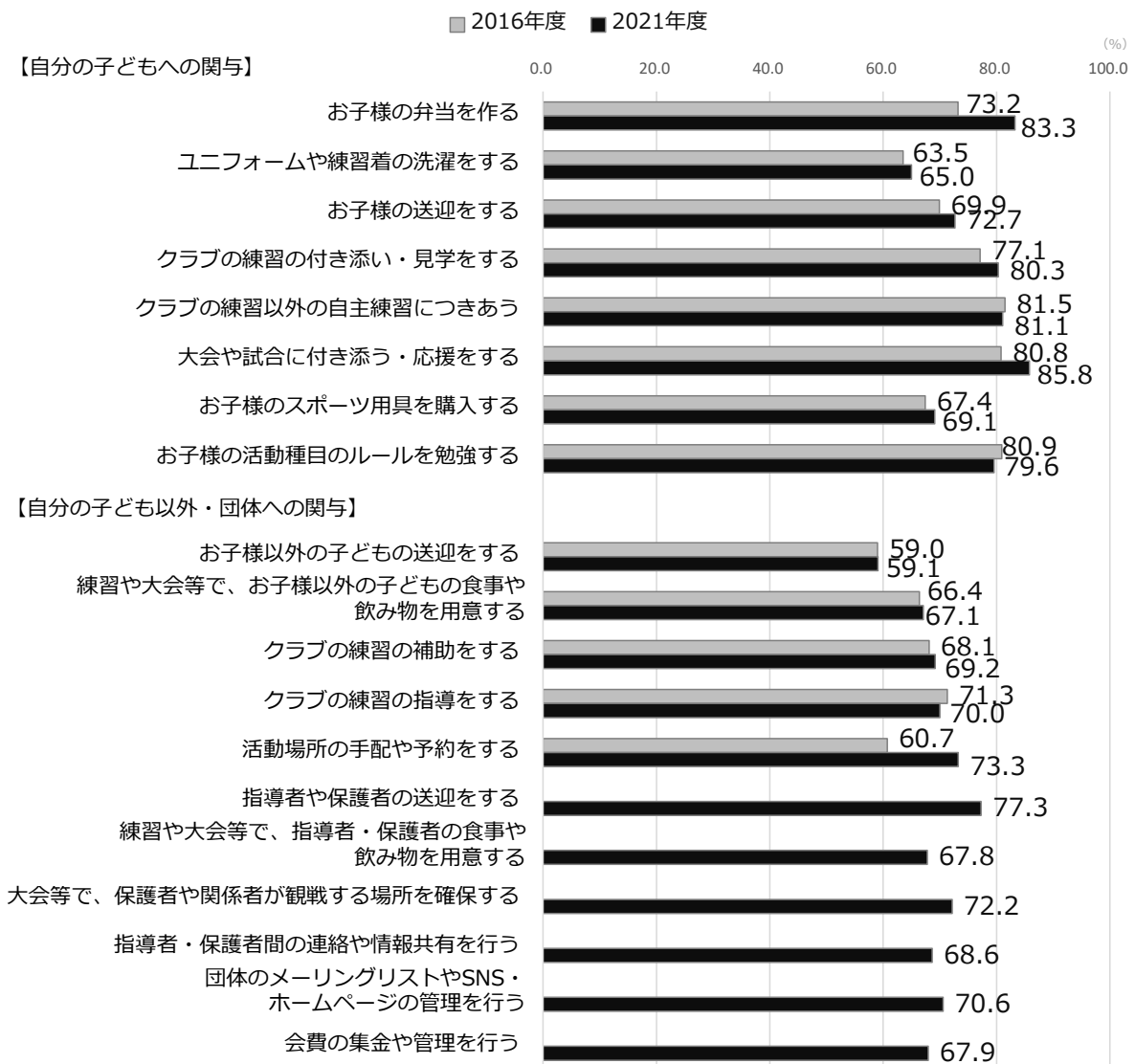
注 2) 配偶者がいる人のみ回答。

#### (4) 母親のやりがい・負担感

子どものスポーツ活動に関与している母親に対して、やりがいや負担を感じているのか尋ねた(図表 3-7、3-8)。やりがいについては全体的に「感じている」の数値が高く、「弁当を作る」「大会や試合に付き添う・応援をする」「活動場所の手配や予約をする」は 2016 年度より 5 ポイント以上増加した。増加の要因として、ひとつには活動機会が減少した分、従来から子どもの活動に深く関与する傾向にあった熱心な保護者がより中心になっていたことが考えられる。また、コロナ禍で保護者が子どもたちの環境をよくすることに対して、よりポジティブな意義を見出せるようになったという心理面での変化も考えられるだろう。

今回の調査で新規項目として追加した団体全体に関与する活動については、一部の母親のみが行っており、最も数が少ない「指導者や保護者の送迎をする」では n=66 である。いずれも 7 割前後が「やりがいを感じている」と回答している。

図表 3-7 母親のやりがい(スポーツ活動をしている子)



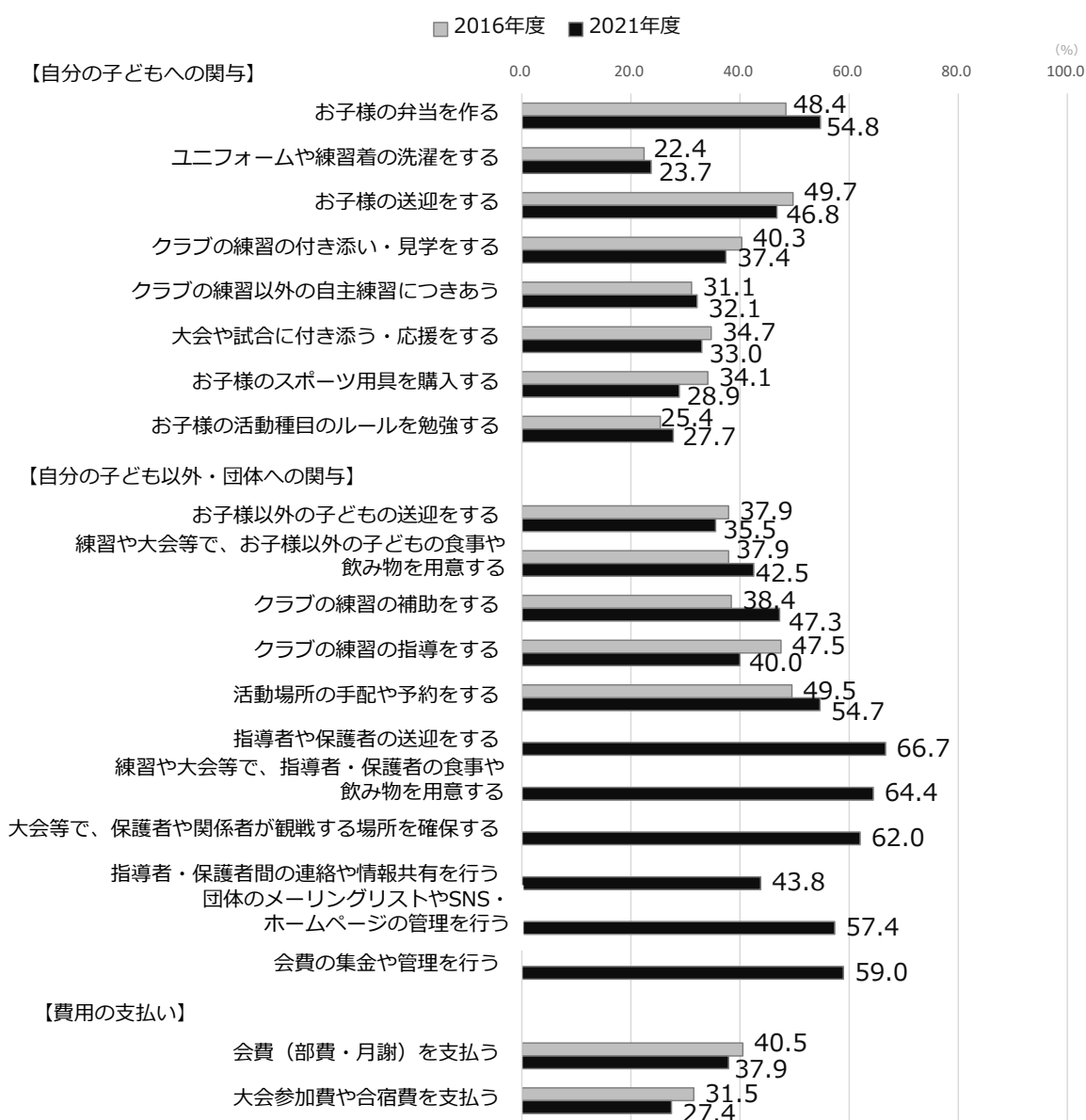
注1) 「とてもやりがいを感じている」+「まあやりがいを感じている」の%。

注2) それぞれの関与を「よくする」「時々する」人を母数にしている。

続いて負担感の結果である(図表 3-8)。2021 年度の数値をみると、今回新たに項目を追加した「自分の子ども以外・団体への関与」で負担感の高さが目立つ。「指導者や保護者の送迎をする」66.7%、「練習や大会等で、指導者・保護者の食事や飲み物を用意する」64.4%、「大会等で、保護者や関係者が観戦する場所を確保する」62.0%、「会費の集金や管理を行う」59.0%、「団体のメーリングリストや SNS・ホームページの管理を行う」57.4%が、全体の上位 5 つを占めている。団体全体に関わる活動は一部の母親のみが行い、やりがいもある程度高いものの、負担感は大いことがわかる。

前回から尋ねている項目で 5 ポイント以上変化したものをみると、増えた項目は「弁当を作る」(6.4 ポイント増)「クラブの練習の補助をする」(8.9 ポイント増)「活動場所の手配や予約をする」(5.2 ポイント増)、減った項目は「スポーツ用具を購入する」(5.2 ポイント減)「クラブの練習の指導をする」(7.5 ポイント減)であった。細かな数値の増減はあるものの、おおむね 2016 年度調査で負担感が高かった項目は今回も高い傾向がみられた。

図表 3-8 母親の負担感(スポーツ活動をしている子)



注 1)「とても負担に感じている」+「やや負担に感じている」の%。

注 2)「会費を支払う」「大会参加費や合宿費を支払う」以外の 19 項目については、それぞれの関与を「よくする」「時々する」人を母数にしている。

母親の負担感について、就業形態別にみた(図表 3-9)。全体的に、正社員・正職員やパート・アルバイトで負担感が大きいことがわかる。特に正社員・正職員では、「お子様の弁当を作る」「指導者や保護者の送迎をする」「練習や大会等で、指導者・保護者の食事や飲み物を用意する」がいずれも6割前後に達している。

就業形態別に数値が高い項目をみると、正社員・正職員では「練習や大会等で、指導者・保護者の食事や飲み物を用意する」62.3%が最も高く、次いで「指導者や保護者の送迎をする」62.0%、「お子様の弁当を作る」59.0%と続く。「パート・アルバイト」では「お子様の弁当を作る」54.4%が最も高く、「練習や大会等で、指導者・保護者の食事や飲み物を用意する」「大会等で、保護者や関係者が観戦する場所を確保する」「団体のメーリングリストや SNS・ホームページの管理を行う」がいずれも50.0%である。専業主婦では「お子様の送迎をする」46.8%が最も高く、「練習や大会等で、指導者・保護者の食事や飲み物を用意する」44.7%、「指導者や保護者の送迎をする」41.9%と続く。いずれの就業形態でも「練習や大会等で、指導者・保護者の食事や飲み物を用意する」は、母親の負担感が高いことがわかる。

図表 3-9 母親の負担感(スポーツ活動をしている子、就業形態別)

|                               | (%)     |           |      |
|-------------------------------|---------|-----------|------|
|                               | 正社員・正職員 | パート・アルバイト | 専業主婦 |
| お子様の弁当を作る                     | 59.0    | 54.4      | 30.2 |
| ユニフォームや練習着の洗濯をする              | 29.4    | 18.6      | 22.3 |
| お子様の送迎をする                     | 47.9    | 42.4      | 46.8 |
| クラブの練習の付き添い・見学をする             | 35.7    | 34.0      | 31.3 |
| クラブの練習以外の自主練習につきあう            | 35.1    | 29.8      | 27.1 |
| 大会や試合に付き添う・応援をする              | 35.4    | 31.4      | 27.4 |
| お子様のスポーツ用具を購入する               | 31.5    | 26.2      | 24.8 |
| お子様の活動種目のルールを勉強する             | 33.3    | 19.8      | 18.8 |
| お子様以外の子どもの送迎をする               | 41.3    | 26.0      | 30.3 |
| 練習や大会等で、お子様以外の子どもの食事や飲み物を用意する | 46.9    | 37.1      | 30.3 |
| クラブの練習の補助をする                  | 45.6    | 33.3      | 33.3 |
| クラブの練習の指導をする                  | 47.5    | 31.0      | 27.8 |
| 活動場所の手配や予約をする                 | 54.0    | 48.3      | 32.4 |
| 指導者や保護者の送迎をする                 | 62.0    | 42.9      | 41.9 |
| 練習や大会等で、指導者・保護者の食事や飲み物を用意する   | 62.3    | 50.0      | 44.7 |
| 大会等で、保護者や関係者が観戦する場所を確保する      | 53.6    | 50.0      | 38.2 |
| 指導者・保護者間の連絡や情報共有を行う           | 51.2    | 37.3      | 23.3 |
| 団体のメーリングリストや SNS・ホームページの管理を行う | 46.3    | 50.0      | 36.7 |
| 会費の集金や管理を行う                   | 53.1    | 46.8      | 27.3 |
| 会費(部費・月謝)を支払う                 | 40.9    | 33.8      | 37.9 |
| 大会参加費や合宿費を支払う                 | 31.8    | 26.5      | 25.5 |

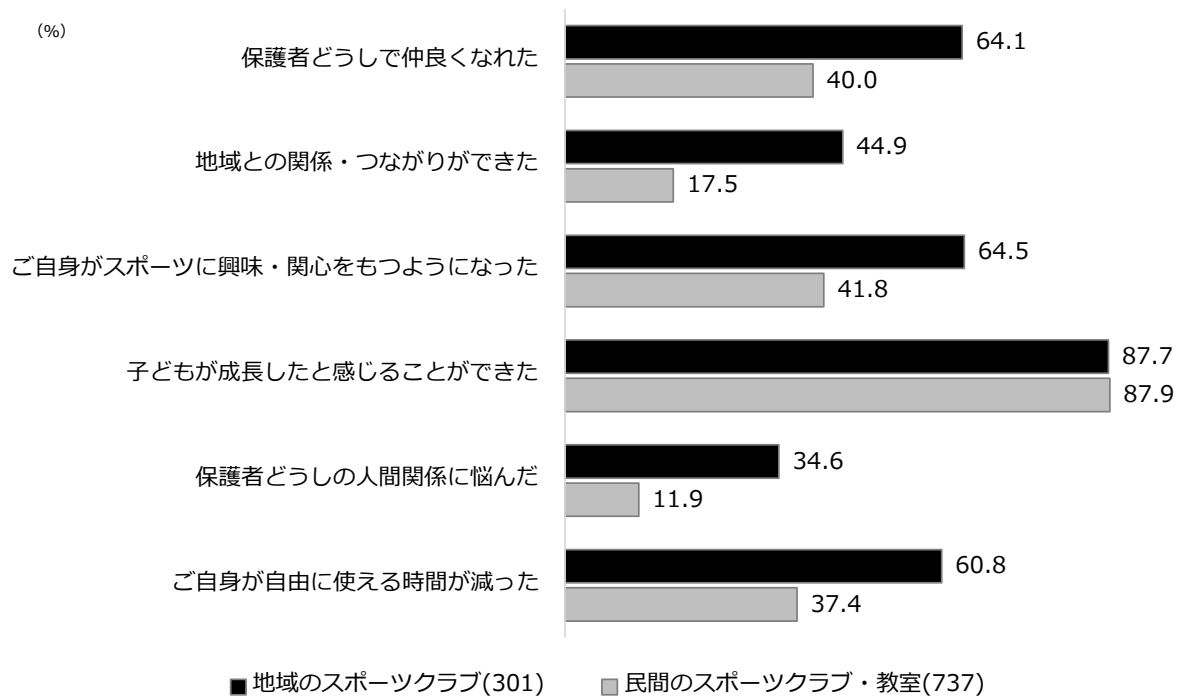
注1) 「とても負担に感じている」+「やや負担に感じている」の%。

注2) 「会費を支払う」「大会参加費や合宿費を支払う」以外の19項目については、それぞれの関与を「よくする」「時々する」人を母数にしている。

## (5) 母親自身の変化

子どものスポーツ活動を通じた母親自身の変化について尋ねた。図表 3-10 はその結果を所属する団体別に示したものである。「子どもが成長したと感じることができた」は地域クラブ 87.7%、民間クラブ 87.9%と、ほぼ変わらない。その他の項目については全て地域クラブの数値が高く、いずれも 20 ポイント以上の差がみられる。「保護者どうして仲良くなれた」等のプラスの変化、「保護者どうしの人間関係に悩んだ」等のマイナスの変化、いずれも保護者の役割が多い地域クラブにおいて、母親たちは自身の変化をより強く感じていることがわかる。

図表 3-10 母親自身の変化(スポーツ活動をしている子・所属する団体別)



注)「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

## 2.4 スポーツ活動をやめた理由・しない理由

### (1) スポーツ活動をやめた理由

子どもが小学生の間にスポーツ活動をやめた経験がある場合に、その理由を尋ねた(図表 4-1)。全体の上位 3 つの理由は「お子様がやめたがっていたから」36.7%、「目標を達成したから」29.4%、「スポーツ以外の習い事や塾に通うことになったから」28.6%となった。

図表 4-1 には学年別の数値も掲載している(「小学生の間にやめた経験」なので、各回答者がやめた学年まで判別できない点には注意が必要である)。学年単位でリニアな関係性がみられる項目は少ないが、大まかな傾向としては、高学年では「お子様がやめたがっていた」(5年生 43.5%、6年生 41.0%)、「目標を達成した」(5年生 37.3%、6年生 37.4%)、「スポーツ以外の習い事や塾に通うことになった」(5年生 33.9%、6年生 34.2%)など、子ども自身の意向や活動内容の変化が 3 割以上と多くなっている。低学年では、「学校の授業や課外活動が忙しくなったから」(1年生 33.0%、2年生 30.8%)、「通いづらい場所にあったから」(1年生 30.9%、2年生 32.7%)が他学年に比べて高い。2017 年に実施したグループインタビューでは「幼稚園の時に通っていたクラブを続けたかったが、幼稚園が遠く小学生になって送迎が大変になった」という声もあり、推測の域を出ないが、幼児期から児童期への生活環境の変化がひとつの理由となっている可能性がある。

また、「費用の負担が大きかったから」は世帯年収別では 400 万円以下 28.7% > 400~600 万円 16.0%=600~800 万円 16.0% > 800 万円以上 8.8%と、差がみられた(図表割愛)。

図表 4-1 スポーツ活動をやめた理由(学年別)

|                         | 全体<br>(n=877) | 1年生<br>(n=94) | 2年生<br>(n=107) | 3年生<br>(n=133) | 4年生<br>(n=144) | 5年生<br>(n=177) | 6年生<br>(n=222) |
|-------------------------|---------------|---------------|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| お子様がやめたがっていたから          | 36.7          | 26.6          | « 38.3         | > 29.3         | 34.0           | < 43.5         | 41.0           |
| 目標を達成したから               | 29.4          | 23.4          | > 17.8         | 18.8           | « 29.9         | < 37.3         | 37.4           |
| スポーツ以外の習い事や塾に通うことになったから | 28.6          | 21.3          | 23.4           | 27.1           | 23.6           | « 33.9         | 34.2           |
| 送迎や付き添いの負担が大きかったから      | 26.6          | 30.9          | 27.1           | 27.1           | 22.9           | < 31.1         | > 23.0         |
| お子様が他のスポーツに興味をもったから     | 26.5          | 33.0          | > 23.4         | 25.6           | 24.3           | < 31.6         | > 23.0         |
| 学校の授業や課外活動が忙しくなったから     | 25.9          | 33.0          | 30.8           | > 24.1         | 24.3           | 27.1           | > 21.6         |
| 活動できる場がなくなったから          | 22.9          | 31.9          | > 25.2         | 27.1           | > 18.8         | 23.7           | > 17.6         |
| お子様のレベルに合わなかったから        | 22.6          | 21.3          | 25.2           | 26.3           | 21.5           | 20.3           | 22.1           |
| 通いづらい場所にあったから           | 21.3          | 30.9          | 32.7           | » 19.5         | 18.1           | < 24.3         | » 12.6         |
| 新型コロナウイルスの感染が心配だったから    | 20.5          | 23.4          | 25.2           | 21.1           | 16.7           | < 23.7         | > 16.7         |
| 指導者や指導方法が合わなかったから       | 18.1          | 23.4          | 19.6           | 18.0           | 16.7           | 15.8           | 18.0           |
| 費用の負担が大きかったから           | 15.5          | 20.2          | 17.8           | 13.5           | 13.9           | 17.5           | 13.1           |
| 保護者の係や当番の負担が大きかったから     | 10.0          | 11.7          | 9.3            | 6.0            | 9.7            | 13.6           | 9.5            |
| 中学受験の準備を始めたから           | 9.7           | 7.4           | 3.7            | 3.0            | < 8.3          | < 13.6         | 15.3           |
| けがや病気で続けられなくなったから       | 6.3           | 8.5           | 5.6            | 1.5            | 4.9            | 7.3            | 8.6            |

注)「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

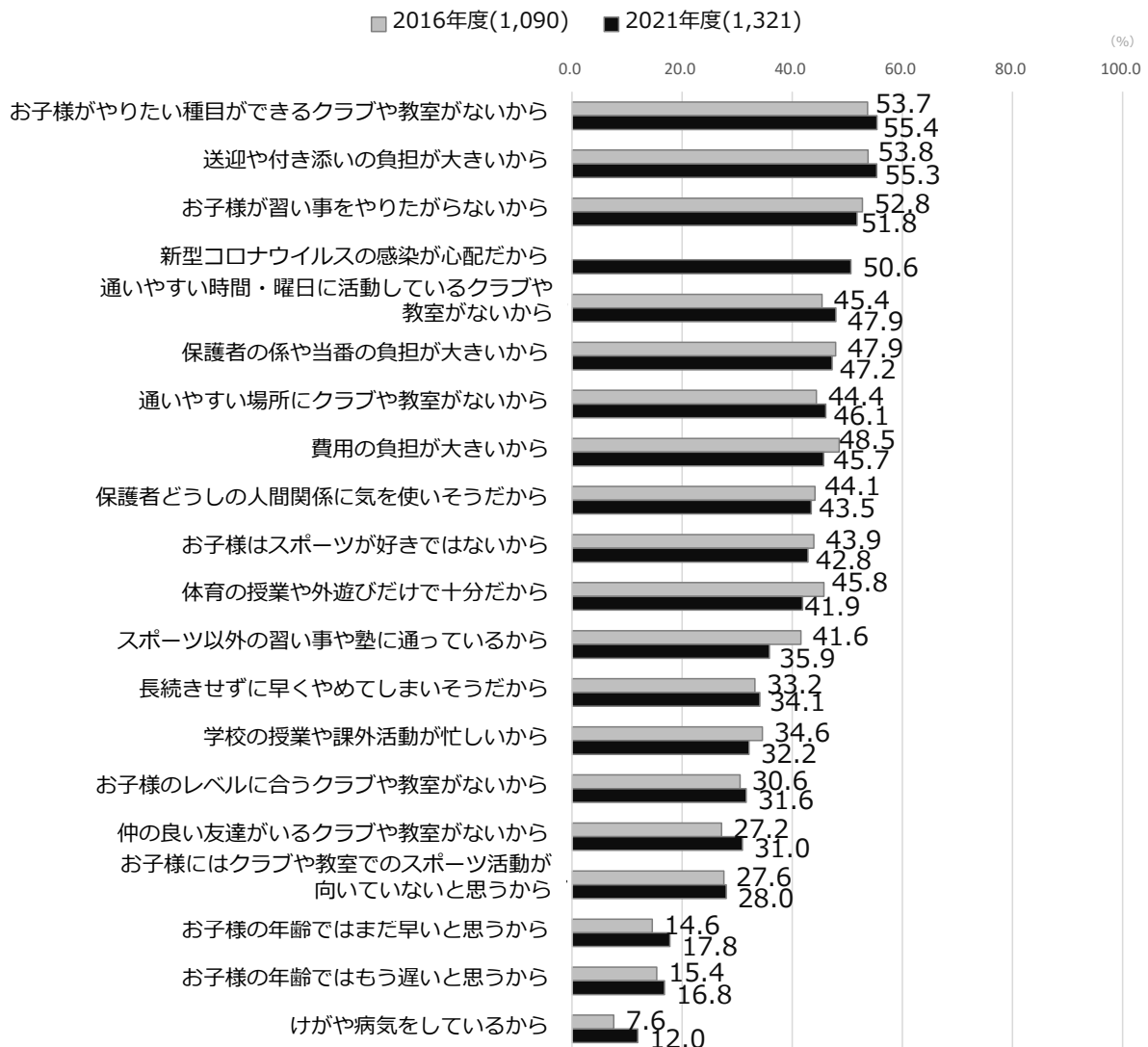


## (2) スポーツ活動をしらない理由

子どもがスポーツ活動をしていない場合に、その理由を尋ねた(図表 4-2)。経年で 5 ポイント以上の変化がみられたのは「スポーツ以外の習い事や塾に通っているから」(5.7 ポイント減)のみで、全体としては 2016 年度から大きな変化はみられなかった。保護者からみた子どものスポーツ活動の阻害要因は、年度による変化が少ないものと考えられる。

2021 年度で半数を超えたのは「お子様がやりたい種目ができるクラブや教室がないから」55.4%、「送迎や付き添いの負担が大きいから」55.3%、「お子様が習い事をやりたがらないから」51.8%、「新型コロナウイルスの感染が心配だから」50.6%の 4 つであった。2016 年度に引き続き「保護者の係や当番の負担が大きいから」47.2%、「費用の負担が大きいから」45.7%も 5 割近くに達した。

図表 4-2 スポーツ活動をしらない理由(スポーツ活動をしていない子)



注)「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

図表 4-2 の「スポーツ活動をしない理由」について、2016 年度調査のデータで因子分析をした結果、大きく 4 つの因子が抽出された(宮本 2017)。具体的には、①保護者の負担が理由(係や当番の負担、保護者どうしの人間関係等) ②立地・環境等が理由(通いやすい場所がない、通いやすい時間・曜日がない等) ③子どもの意向・適性が理由(子どもには向いていない、スポーツが好きではない等) ④他の活動が理由(スポーツ以外の習い事・塾、学校が忙しい)の 4 点である。

①保護者の負担に関わる項目について世帯年収別に分析すると、2016 年度調査とほぼ同様の傾向がみられた(図表 4-3)。「費用の負担が大きいから」(400 万円未満 59.9%>800 万円以上 27.3%、以下同)で特に差が大きい。「送迎や付き添いの負担が大きいから」(61.8%>47.9%)、「保護者の係や当番の負担が大きいから」(53.1%>38.7%)、「保護者どうしの人間関係に気を使いそうだから」(48.1%>31.4%)でも差がみられ、保護者の負担感は、家庭の SES(Socio-economic status, 家庭の社会経済的背景)や保護者の生活状況の影響を受けている可能性が指摘できる。

④の他の活動について世帯年収別に分析すると、「学校の授業や課外活動が忙しいから」では明らかな差はみられないが、「スポーツ以外の習い事や塾に通っているから」は 400 万円未満 29.2%<800 万円以上 48.5%と約 20 ポイントの差がみられる。教育の研究においては、特に両親大卒層で子どもが低学年のうちに多様な習い事を経験させ、4 年生ごろから学習塾へと焦点を変えることが、複数の調査結果から指摘されている。そのような先行研究の知見を支持する結果といえるだろう。

②の立地・環境等については、属性別で多少の差異はみられるものの、明確な傾向を見出すことはできなかった。

③の子どもの意向・適性に関しては、保護者の期待別で差がみられる(図表 4-4)。「仲の良い友達がいるクラブや教室がないから」のみ「スポーツは校内で活躍できるぐらいに上手になってほしい(以下、「校内で活躍できる」群)」37.5%>「スポーツが下手でも、健康で生活するのに困らない体力があればよい(同、「下手でもよい」群)」28.2%と、「校内で活躍できる」群のほうが高い。それ以外はすべて「下手でもよい」群の数値が高くなっている。両群の差は特に、「お子様はスポーツが好きではないから」(28.0%<52.9%、24.9 ポイント差)、「お子様にはクラブや教室でのスポーツ活動が向いていないと思うから」(20.8%<34.6%、13.8 ポイント差)で大きい。

③の理由と保護者の期待との間に直接関連があるというよりは、子ども自身の気質・意向、運動能力などが保護者の期待につながり、このような結果になっている可能性がある点には注意が必要である。いずれにせよ保護者の期待が低い家庭においては、子どもの意向・適性を理由にスポーツ活動から遠ざかる傾向がある。スポーツを敬遠する親子が地域・民間の機会を活用できていない点は、Sport for Everyone の観点から重要な課題として指摘できるだろう。

図表 4-3 スポーツ活動をしない理由(スポーツ活動をしていない子・世帯年収別)

|                       | 世帯年収別            |                  |                  |                  |
|-----------------------|------------------|------------------|------------------|------------------|
|                       | 400万円未満<br>(322) | 600万円未満<br>(313) | 800万円未満<br>(212) | 800万円以上<br>(194) |
| 費用の負担が大きいから           | 59.9             | 49.5             | 38.2             | 27.3             |
| 送迎や付き添いの負担が大きいから      | 61.8             | 57.2             | 53.8             | 47.9             |
| 保護者の係や当番の負担が大きいから     | 53.1             | 49.8             | 46.7             | 38.7             |
| 保護者どうしの人間関係に気を使いそうだから | 48.1             | 49.8             | 41.5             | 31.4             |
| スポーツ以外の習い事や塾に通っているから  | 29.2             | 34.2             | 39.6             | 48.5             |
| 学校の授業や課外活動が忙しいから      | 33.9             | 28.1             | 33.5             | 36.6             |

注)「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

図表 4-4 スポーツ活動をしない理由(スポーツ活動をしていない子・保護者の期待別)

|                                 | 保護者の期待別             |                    |                                |
|---------------------------------|---------------------|--------------------|--------------------------------|
|                                 | 校内で活躍できる<br>(n=168) | 人並みにできる<br>(n=632) | 生活に困らなければ<br>下手でもよい<br>(n=497) |
| お子様はスポーツが好きではないから               | 28.0                | 39.4               | 52.9                           |
| お子様が習い事をやりたがらないから               | 45.8                | 53.2               | 53.5                           |
| 仲の良い友達がいるクラブや教室がないから            | 37.5                | 31.6               | 28.2                           |
| 長続きせずに早くやめてしまいそうだから             | 32.1                | 32.4               | 37.4                           |
| お子様にはクラブや教室でのスポーツ活動が向いていないと思うから | 20.8                | 24.7               | 34.6                           |

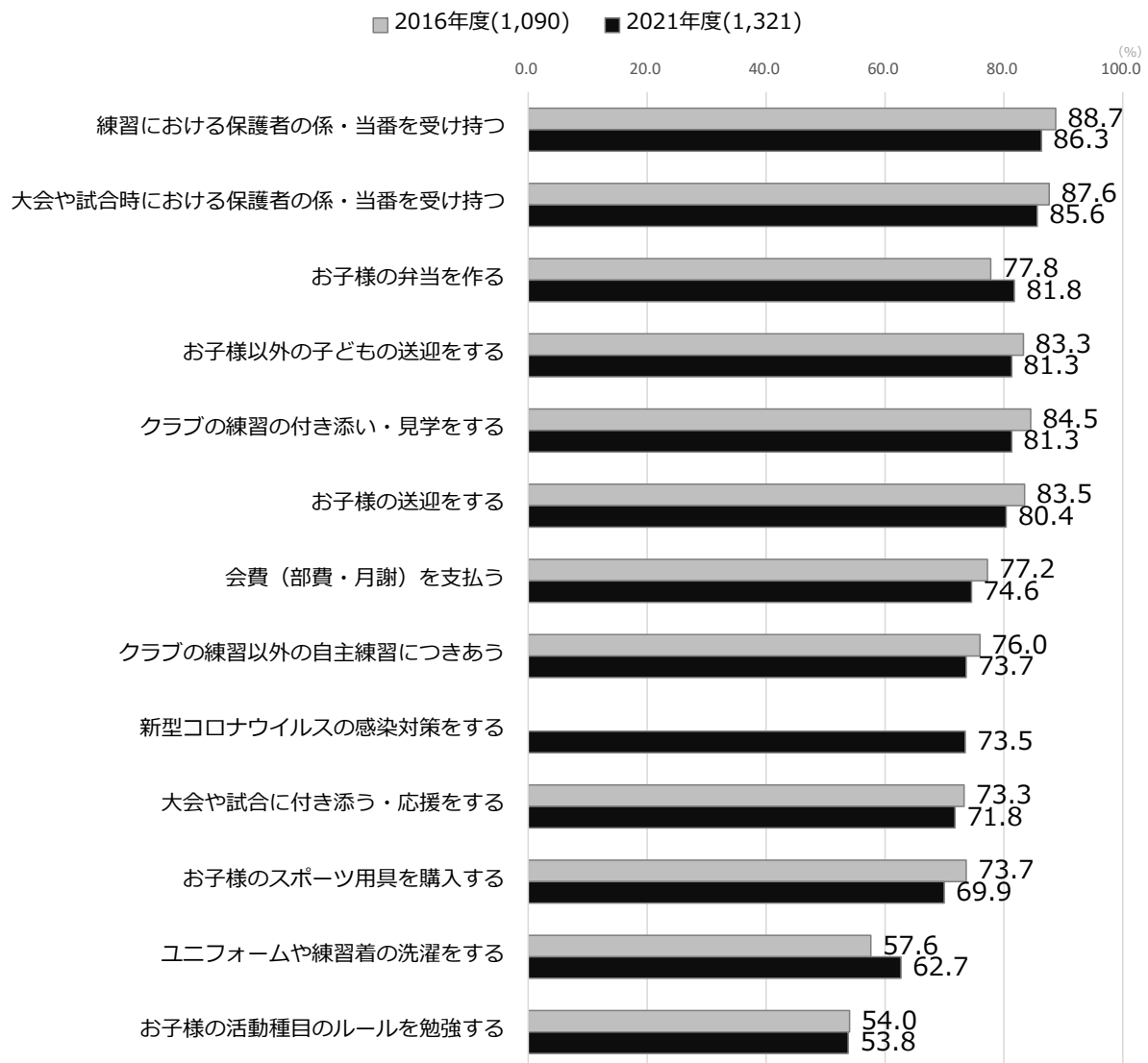
注)「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

### (3) 母親の負担感

子どもが現在スポーツ活動をしていない場合に、「もしこれからお子様が団体(クラブ・教室等)に所属してスポーツ活動をするようになったら、あなたご自身はどれくらい負担を感じますか」と、状況を想定した質問をした(図表 4-5)。2016 年度と比較して目立った数値の変動はない。「練習における保護者の係・当番を受け持つ」「大会や試合時における保護者の係・当番を受け持つ」がいずれも 85%程度と、最も高くなっている。図表 4-6 では 2021 年度の数値の詳細を示したが、「練習における保護者の係・当番を受け持つ」「大会や試合時における保護者の係・当番を受け持つ」は「とても負担に感じると思う」だけでも約 55%と半数を超えていて、スポーツ活動をしていない母親にとっての負担感が高い様子がうかがえる。

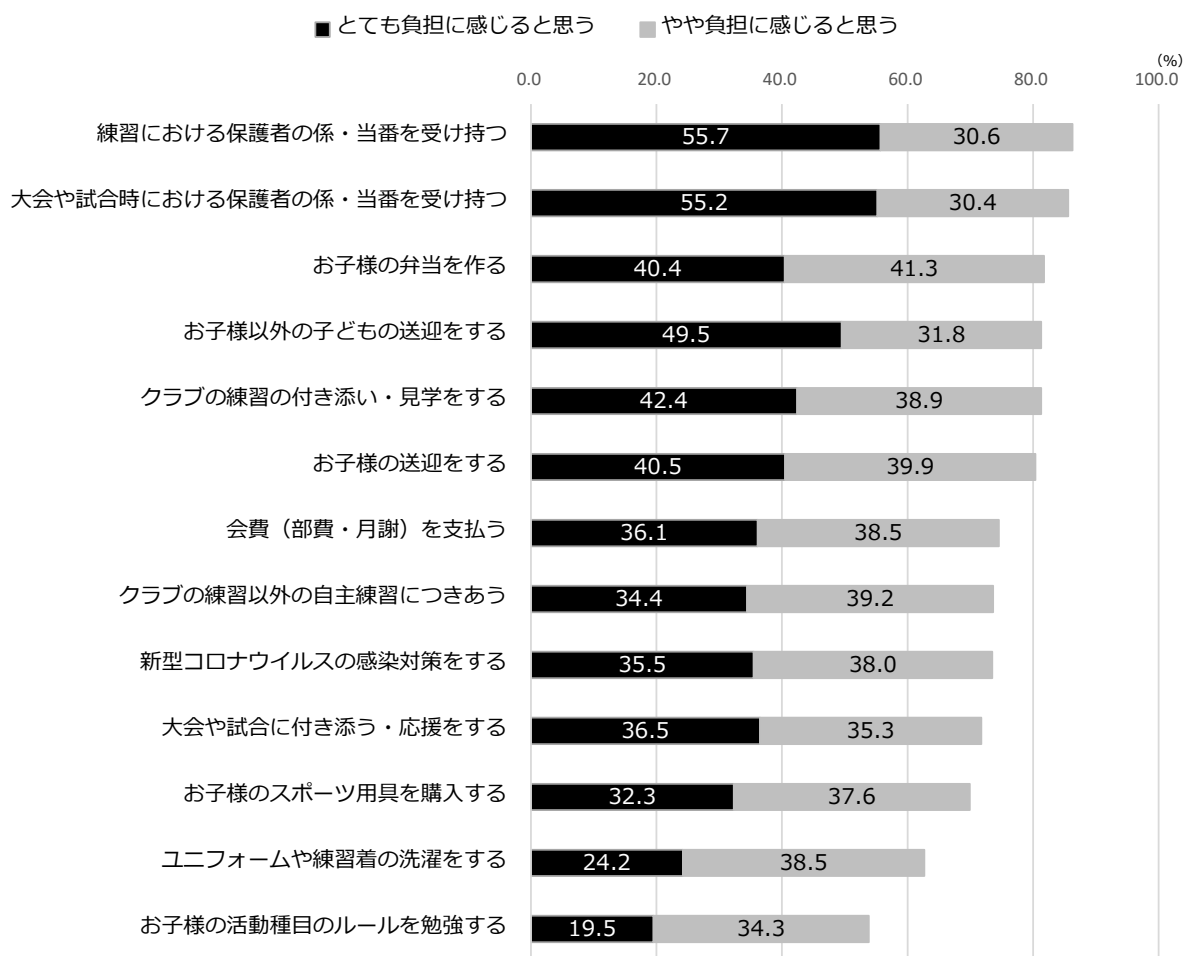
図表 3-7、3-8 でみたように、スポーツ活動に関与する母親は、ある程度負担感があるものの、やりがいにも支えられていた。しかしスポーツ活動をしていない子どもの母親にとっては、自身が関与する場合の負担感が非常に大きく、そのような意識は 5 年前からほぼ変化がみられないことがわかった。

図表 4-5 母親の負担感(スポーツ活動をしていない子)



注)「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

図表 4-6 母親の負担感(スポーツ活動をしていない子)



n=1,321

母親がイメージする負担感は、ライフスタイルによっても異なる。図表 4-7 をみると、全体的な傾向としては「『仕事』を優先している」母親で負担感が高く、「『家庭生活』と『地域・個人の生活』を優先している」や「『仕事』と『家庭生活』と『地域・個人の生活』を優先している」母親の負担感は低い。特に差が大きいものに注目すると、「お子様の活動種目のルールを勉強する」「練習における保護者の係・当番を受け持つ」「大会や試合時における保護者の係・当番を受け持つ」で、「仕事」を優先する群と「仕事、家庭生活、地域・個人の生活」を優先する群との間には、26.6～28.8 ポイントの差がある。

母親のライフスタイルは当人の価値観だけではなく、家庭をめぐるさまざまな状況の影響を受けるものと考えられる。地域や個人の生活の優先度をあげられる母親はともかく、そうではない母親・家庭にとって、子どものスポーツ活動における保護者の負担感がより高くなっていると推察される。

図表 4-7 母親の負担感(スポーツ活動をしていない子・生活の優先度別)

|                         | 「仕事」<br>(n=88) |   | 「家庭生活」<br>(n=591) |  | 「仕事」と<br>「家庭生活」<br>(n=358) |   | 「家庭生活」と<br>「地域・個人の生活」<br>(n=77) |   | 「仕事」と<br>「家庭生活」と<br>「地域・個人の生活」<br>(n=46) |
|-------------------------|----------------|---|-------------------|--|----------------------------|---|---------------------------------|---|--|
| お子様の弁当を作る               | 45.5           |   | 42.1              |  | 44.4                       | > | 35.1                            | > | 28.3                                     |
| ユニフォームや練習着の洗濯をする        | 31.8           | > | 24.0              |  | 23.7                       |   | 24.7                            | » | 13.0                                     |
| お子様の送迎をする               | 52.3           | » | 40.8              |  | 40.8                       |   | 37.7                            |   | 39.1                                     |
| クラブの練習の付き添い・見学をする       | 55.7           | » | 43.3              |  | 43.6                       |   | 39.0                            |   | 37.0                                     |
| クラブの練習以外の自主練習につきあう      | 47.7           | » | 35.5              |  | 33.8                       | > | 28.6                            |   | 28.3                                     |
| 大会や試合に付き添う・応援をする        | 47.7           | > | 38.9              |  | 36.0                       |   | 31.2                            | > | 23.9                                     |
| お子様のスポーツ用具を購入する         | 45.5           | » | 31.3              |  | 33.8                       | > | 27.3                            |   | 26.1                                     |
| お子様の活動種目のルールを勉強する       | 35.2           | » | 18.3              |  | 18.7                       | > | 13.0                            | > | 6.5                                      |
| お子様以外の子どもの送迎をする         | 56.8           |   | 54.7              |  | 50.6                       | » | 40.3                            |   | 39.1                                     |
| 練習における保護者の係・当番を受け持つ     | 63.6           |   | 60.6              |  | 59.5                       | » | 49.4                            | » | 37.0                                     |
| 大会や試合時における保護者の係・当番を受け持つ | 61.4           |   | 60.2              |  | 59.5                       | » | 48.1                            | » | 32.6                                     |
| 会費(部費・月謝)を支払う           | 48.9           | » | 35.2              |  | 36.6                       |   | 37.7                            | > | 30.4                                     |
| 新型コロナウイルスの感染対策をする       | 39.8           |   | 37.7              |  | 35.5                       |   | 31.2                            | > | 23.9                                     |

注)「とてもあてはまる」の%。

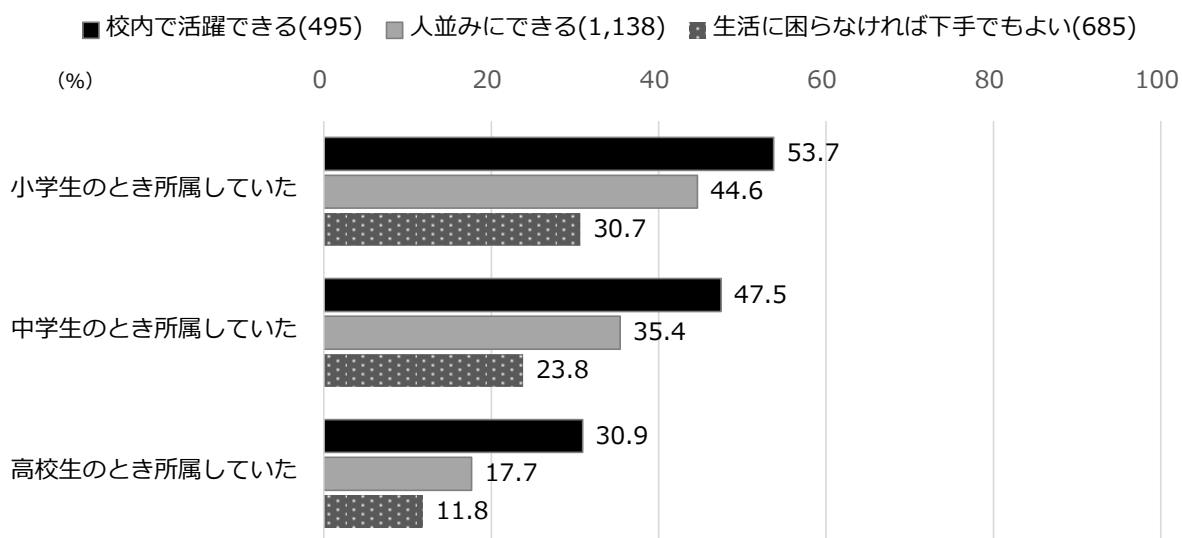
## 2.5 母親自身が子どもの頃のスポーツ経験

### (1) 母親自身のスポーツ経験

母親自身が子どもの頃に、スポーツ活動を行う団体(運動部活動を含む)に所属していた経験があるかを尋ねた。全体では「小学生のとき所属していた」のは42.7%、「中学生のとき」は34.8%、「高校生のとき」は19.0%であった(図表割愛)。

図表 5-1 で、現在の母親の子どもに対する期待別にみると、「スポーツは校内で活躍できるぐらいに上手になってほしい」と期待する母親は「小学生のとき」53.7%、「中学生のとき」47.5%、「高校生のとき」30.9%と、他の群に比べてスポーツ活動をする団体に所属していた比率が高い。自身の子どもの頃のスポーツ経験が、保護者となった現在の子どもへの期待と関連していることがわかる。

図表 5-1 母親が子どもの頃の所属経験(保護者の期待別)



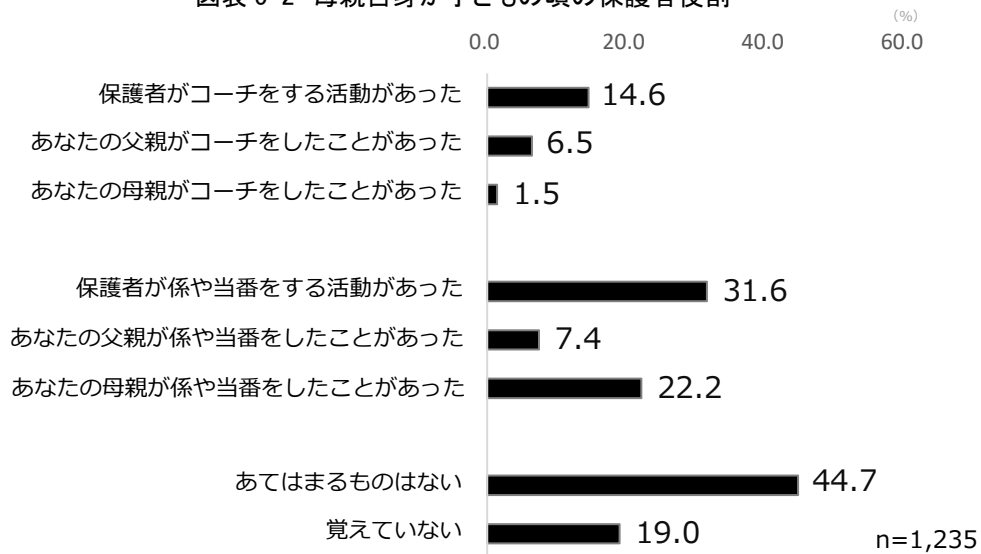
注) 複数回答。

## (2) 母親自身が子どもの頃の保護者役割

2017年に実施した母親へのインタビュー調査のなかで、「子どものころ弟が野球をやっていた時に母親がかかりつきりだった」という声があがった。そこで、母親自身に子どもの頃を振り返ってもらい、本人やきょうだいがスポーツ活動をしていた場合の保護者の関与について尋ねた(図表 5-2)。

「覚えていない」が約 2 割いるものの、全体では「保護者がコーチをする活動があった」は 14.6%、「保護者が係や当番をする活動があった」は 31.6%であった。「保護者がコーチをする活動」では、「父親がコーチをしたことがあった」6.5%>「母親がコーチをしたことがあった」1.5%と父親のほうが多く、「保護者が係や当番をする活動」では母親 22.2%>父親 7.4%と母親のほうが多かった。過去の振り返りとして尋ねているため限界はあるものの、子どもたちの祖父母世代から、指導以外の関与は母親が中心であるという構造には変化がない様子がうかがえる。

図表 5-2 母親自身が子どもの頃の保護者役割



注 1)複数回答。

注 2)母親またはそのきょうだいが小学生の頃にスポーツ活動をしていた場合に尋ねている。

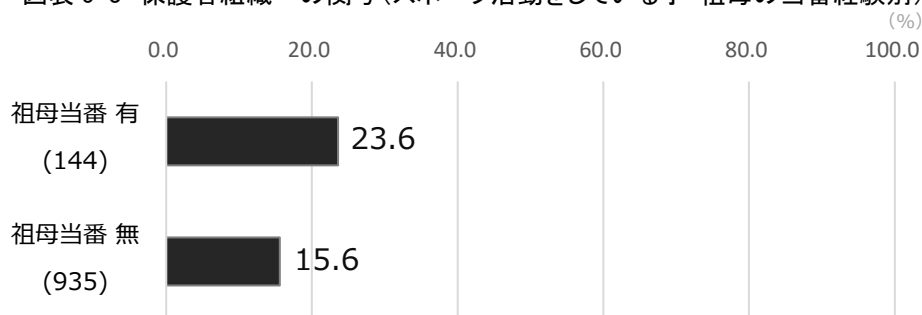


母親自身の過去の経験は、現在の子どもに対するサポートに影響するのだろうか。ここでは祖母(母親の実母)の当番経験の有無別による分析を行った。図表 5-3 は、祖母の当番経験の有無別に、子どもがスポーツ活動をしている母親が保護者組織に直接関わっている(図表 2-8 参照)比率を算出したものである。これをみると、祖母が当番等をしていたケースでは 23.6%、していないケースでは 15.6%と、祖母が当番を経験していた群で、母親も当番等をしている比率が高い。

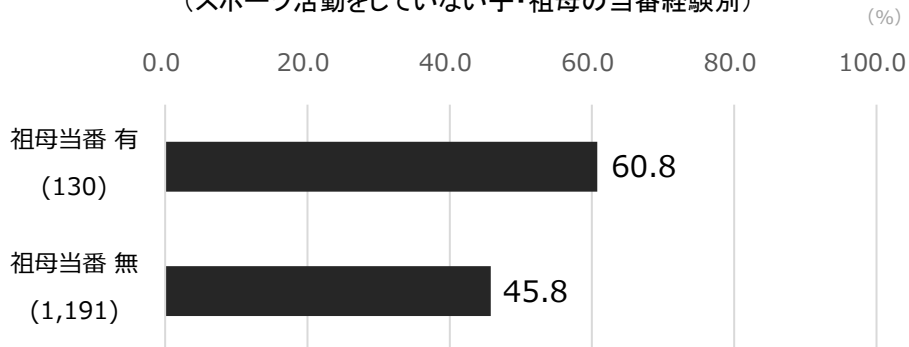
一方で、子どもがスポーツ活動をしていない母親について、「保護者の係や当番の負担が大きいから」を理由にあげた比率を祖母の当番経験別にみると、祖母が当番を経験していた群で 15 ポイント高い(図表 5-4)。

祖母の当番の有無における n 数に偏りがあるため一般化するのは難しいが、祖母世代の経験は母親世代に影響を与え、子どものスポーツ活動への期待・負担感などにつながっていることが推察される。具体的なメカニズムの解明は今後の研究課題のひとつといえるだろう。

図表 5-3 保護者組織への関与(スポーツ活動をしている子・祖母の当番経験別)



図表 5-4 「保護者の係や当番の負担が大きいから」の比率(スポーツ活動をしていない子・祖母の当番経験別)



注)子どもがスポーツ活動をしていない理由。「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

## 2.6 保護者の当番制や人間関係に対する思い

最後に、子どものスポーツ活動における保護者の当番制、保護者どうしや指導者との人間関係について、心配な点や課題だと思う状況について尋ねた自由記述をみてみたい(図表 6-1)。「特にない」「わからない」「関わっていない」「当番がない」「問題がない」等の具体性のない記述を除き、何かしら意見が書かれていたのは 1,376 件であった。属性別にみると、高学年の子どもの母親、スポーツ活動をしていない子どもの母親がより多く記述していた。

当番への負担感のイメージから、そもそも当番制のあるクラブを敬遠する声や、当番内容に関する疑問や不満が多くみられた。また保護者どうしの当番の負担量の違いから生じる不公平感や人間関係への不安もあった。一方、少数ではあったが当番制があるものの良好な人間関係を築いているという意見や、やれる人がやるよりも当番制のほうが平等という意見もみられた。

図表 6-1 保護者の当番制や人間関係に対する思い

| カテゴリー | 回答   |
|-------|--|
| 負担感   | お茶当番や、大会会場への保護者の送迎は面倒なので、保護者の関与しないものをえらぶようにしている。   |
|       | 子どもにスポーツをやらせたいと考えた時、保護者の負担があることは多少は仕方ないと思うが、それが大き過ぎて続けさせたくても続けられないのは問題があると思う。いろいろな競技に色々な選択肢があれば良いと思う。  |
|       | すべて含めての金額にしてほしい。当番や送迎など他に兄弟がいたりすると、とてもじゃないけど時間がない。   |
|       | 会費を支払っているのに、保護者の負担が多すぎる。手ぶらで観戦に行けるようにしてほしい。  |
|       | 我が家の方針としては、子供が楽しくスポーツに関われたらそれで満足なのですが、すでに所属している保護者の方々の目も厳しく、当番制も初心者にはしんどい部分もありそうなのでもっとフランクに始められるクラブが増えたらありがたいと思っています。  |
|       | 無駄は減らし、外注できるところは極力外注し、あくまでも子供のための活動として、保護者同士は対等でドライな関係であるべき。   |
|       | 自分の家の子供のことならばやるが、他の家の子供の面倒(送迎・練習付き添いなど)まで見なければいけないのは、とても負担な上に、万が一事故などがあつた場合に責任を取れないから絶対にやりたくない。  |
|       | 部費を払っているのにコーチの弁当・お茶を用意する当番があつて驚いた。質素な弁当だと子どもがレギュラーから外されるのでは?と心配して豪華な弁当を用意する保護者がいて揉めたこともあつたそうで、呆れた。子ども達を車で送迎する当番もあるそうで、運転免許を持っていない自分には無理だと思った。                    |
|       | 母子家庭の方も参加しやすいなど、理解が必要。   |
|       | 母親ばかり負担が来るのもっと自由に活動出来たらいいなと思います。   |
| 不公平   | 当番制はないほうがいいが、それでは少年団が成り立たないというジレンマを感じる   |
|       | やる人とやらない人の差が激しいので不公平感が生まれやすい   |
|       | 共働きだから協力できないとか、専業主婦だからできるとか、一概に言えず、それぞれ家庭によつても事情があるため、常に平等にできるとは言えないと思う。   |
| 人間関係  | 大会時の手伝いなどは決まった保護者だけに負担がいかないように考えてほしいと思う。少しでも謝礼などがあればやってもいいと思う人が増えると思う。   |
|       | LINEなど連絡が取りやすい分トラブルも起こりやすそう  |
|       | いろいろな保護者があるので、意見が合わなかったり新しく人間関係をきずくのは大変  |
| 感染対策  | 以前からクラブにいた親が変に力を持っている場合、その人に嫌われてはならないなど、面倒なことがある。子供の上達を純粋に見守りたいだけなのに、親同士のいざこざに悩まされてしまい、通わせるのが嫌になる。   |
|       | 気が合う人がいるかどうかわからないのは憂鬱。また、役割を分担する際の駆け引きが苦手なので、それも憂鬱。できれば、任せきりにできれば良いと思っている。   |
|       | コロナの事があるので当番制にせず各自でやれば良いと思う  |
| 好意的意見 | 試合などの際の配車担当などが、コロナの影響で非常に難しくなっていると思う。  |
|       | 関係がとても良好で、みんなで助け合つてやっている。子どもたちは、東京都では優秀な成績を収め、次の関東大会めざして練習中。子どもたちの頑張りをみていたら、親も協力したい気持ちが自然と出てくる。課題は、いまのところみあたらない。   |
|       | 子供のためなら当番制なども必要なことでもあるし、やりがいがあると思う   |
| その他   | 当番制は平等だと思うのでよいと思う  |
|       | 親と指導者・子供との相性や関係次第では、エゴ崩壊があつたり、感情的になりそうに嫌。子供の能力が高くて、指導者との相性がイマイチだったり、親が当番を率先してしないと、試合に出してもらえなそう。  |
|       | 当番制や保護者の係が嫌で子供にそのスポーツをさせたくない保護者が増えているという理由で所属しているクラブも保護者の負担を減らそうと当番を廃止するようになりました。親としては負担が減り楽になりましたがその分練習への参加や手伝いが減り保護者同士の集まりや会話する機会も減りLINEでの連絡ばかりになったことは少し寂しいです。 |

注)表記・表現は基本的に原文(回答)のまま引用している。

### 3. 父親の関与と母親のやりがい・負担感

子どもがスポーツ活動をしている場合の、父親の関与の実態と、母親が関与している係や当番に対するやりがいや負担感との関係についてみていく。まず、母親と父親それぞれで関与しているものの項目数を図表 1 に示した。その結果、2 章でもすでに述べているとおり、母親のほうが多くの役割を担っていることがわかる。

図表 1 母親と父親の担う役割の個数(平均)

|                  | 母親(1,079) | 父親(987) |
|------------------|-----------|---------|
| 関与していること (全19項目) | 7.4       | 4.3     |

注)項目については図表 3-3・3-4 を参照。「全くしない」以外を選択した個数を算出。

次に父親が担う係・当番の項目数に応じて、図表 2 のように 3 群にわけた。

図表 2 父親の関わりレベル別の分類

|            | n   | %    |
|------------|-----|------|
| 全く関わっていない  | 296 | 27.4 |
| 1~3個関わっている | 378 | 35.0 |
| 4個以上関わっている | 405 | 37.5 |

注)項目については図表 3-4 を参照。「全くしない」以外を選択した個数を算出。

分類した 3 群について、母親が担っている役割の個数およびやりがいと負担を感じる項目数を図表 3 に示した。やりがいと負担感に記載している%は、やりがいと負担感の項目数を母親が担っている役割の項目数で割った数値である。つまり、母親自身が担っている役割のうち、やりがいや負担を感じるものがどの程度あるかを示している。

その結果、母親のやりがいは、父親が「4 項目以上関わっている」群で 68.6%と最も高く、「1~3 項目関わっている」群 57.1%と 10 ポイント以上の差があった。一方で母親の負担感、父親が「1~3 項目関わっている」群 39.3%が最も少なく、「4 項目以上関わっている」群 47.1%と 7.8 ポイントの差があった。父親が「4 項目以上関わっている」群が、母親はやりがいも負担感も最も抱えている結果であった。

図表 3 やりがいと負担を感じる個数(父親の関わりレベル別)

|               | 全く関わっていない |            | 1~3項目関わっている |            | 4項目以上関わっている |            |
|---------------|-----------|------------|-------------|------------|-------------|------------|
|               | n         | 個数         | n           | 個数         | n           | 個数         |
| 母親が担っている役割の個数 | 296       | 5.9        | 378         | 5.6        | 405         | 10.2       |
| やりがいをを感じる個数   | 293       | 3.7(62.7%) | 378         | 3.2(57.1%) | 405         | 7.0(68.6%) |
| 負担感を感じる個数     | 296       | 2.4(40.7%) | 378         | 2.2(39.3%) | 405         | 4.8(47.1%) |

注1) 役割の項目については図表3-3・3-4を参照。「全くしない」以外を選択した個数を算出。

注2) やりがいは、「とてもやりがいを感じている」+「まあやりがいを感じている」を選択している個数から算出。

注3) 負担感、「とても負担に感じている」+「やや負担に感じている」を選択している個数から算出。

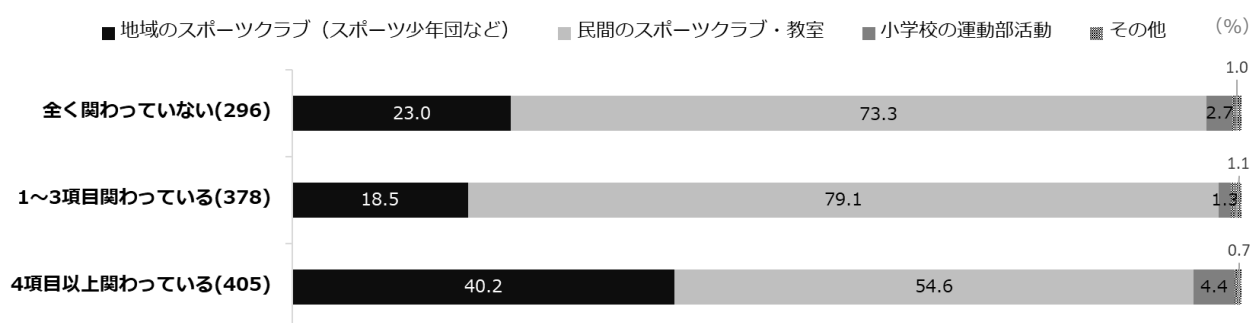
注4) カッコ内の%は、担っている役割に対する割合を示す。

次に、父親の関わりレベル別に、現在行っている種目数と1か月あたりの支出の平均値、標準偏差を示した(図表4)。その結果、現在の種目数や1か月あたりの支出については、父親の関与との関連はみられなかった。また所属している団体の種類をみると、父親が4項目以上関わっている家庭のうち、40.2%が「地域のスポーツクラブ」と回答した(図表5)。

図表4 現在行っている種目数と1か月あたりの支出(父親の関わりレベル別)

|                    |      | 現在の種目数 | 1か月あたりの支出 |
|--------------------|------|--------|-----------|
| <b>全く関わっていない</b>   | 平均値  | 1.3    | 7184.2    |
|                    | 度数   | 296    | 296       |
|                    | 標準偏差 | 0.590  | 6330.234  |
| <b>1～3項目関わっている</b> | 平均値  | 1.3    | 7457.8    |
|                    | 度数   | 378    | 378       |
|                    | 標準偏差 | 0.545  | 7381.302  |
| <b>4項目以上関わっている</b> | 平均値  | 1.5    | 6770.0    |
|                    | 度数   | 405    | 405       |
|                    | 標準偏差 | 0.775  | 7777.483  |

図表5 所属している団体の種類(父親の関わりレベル別)



続いて現在行っている種目をみると、父親が4項目以上関わる群では、地域のクラブで行われることが多い「サッカー、フットサル」「野球」の割合が、他より多い(図表6)。

図表6 現在行っている種目(父親の関わりレベル別)

|            | 全く関わっていない<br>(296) | 1~3項目関わっている<br>(378) |   | 4項目以上関わっている<br>(405) |
|------------|--------------------|----------------------|---|----------------------|
| サッカー、フットサル | 10.1%              | 10.3%                | « | 22.7%                |
| ゴルフ        | 0.3%               | 0.0%                 |   | 2.2%                 |
| 野球         | 3.0%               | 1.1%                 | < | 10.9%                |
| ソフトボール     | 0.0%               | 1.1%                 |   | 1.5%                 |
| バスケットボール   | 4.7%               | 4.5%                 |   | 7.4%                 |
| バレーボール     | 1.7%               | 1.1%                 |   | 3.0%                 |
| バドミントン     | 1.7%               | 0.5%                 |   | 4.2%                 |
| ラグビー       | 0.0%               | 0.5%                 |   | 1.0%                 |
| 卓球         | 2.4%               | 1.1%                 |   | 0.5%                 |
| テニス(硬式)    | 3.7%               | 2.6%                 |   | 5.9%                 |
| ソフトテニス(軟式) | 0.7%               | 1.1%                 |   | 1.7%                 |
| 体操競技、新体操   | 2.7%               | 2.6%                 |   | 4.0%                 |
| 体操教室、体育教室  | 15.5%              | 14.8%                |   | 10.6%                |
| バレエ、ダンス    | 13.9%              | 10.8%                |   | 11.9%                |
| 陸上競技、ランニング | 2.7%               | 1.3%                 |   | 4.2%                 |
| 水泳(スイミング)  | 59.5%              | < 64.8%              | » | 40.5%                |
| 剣道         | 0.7%               | 1.6%                 |   | 1.7%                 |
| 柔道         | 0.0%               | 0.0%                 |   | 0.5%                 |
| その他の武道     | 5.4%               | 6.3%                 | < | 12.6%                |
| スキー、スノーボード | 1.4%               | 0.3%                 |   | 3.7%                 |
| スケート       | 0.0%               | 0.5%                 |   | 0.7%                 |
| その他        | 0.3%               | 2.1%                 |   | 2.0%                 |

さらに子どもが所属する団体の活動頻度(図表7)と1回あたりの活動時間(図表8)をみていく。その結果、活動頻度では週2日以上(「週に2~3日くらい」~「週に6~7日くらい」の合計)と回答した割合が、「全く関わっていない」群23.3%、「1~3項目関わっている」群21.7%、「4項目以上関わっている」群46.5%という結果であった。また1回あたりの活動時間も、2時間以上(「2時間くらい」~「3時間以上」の合計)と回答した割合が、「全く関わっていない」群15.6%、「1~3項目関わっている」群12.4%、「4項目以上関わっている」群38.3%で、父親が4項目以上関わっている家庭では子どものスポーツ活動の頻度が多く、1回あたりの時間も長いという結果であった。

図表 7 子どもが所属する団体の活動頻度（父親の関わりレベル別）

|           | 全く関わっていない<br>(296) | 1～3項目関わっている<br>(378) |   | 4項目以上関わっている<br>(405) |
|-----------|--------------------|----------------------|---|----------------------|
| 月に1日未満    | 0.7%               | 0.5%                 |   | 0.7%                 |
| 月に1日くらい   | 1.0%               | 0.0%                 |   | 1.0%                 |
| 月に2～3日くらい | 6.1%               | 4.8%                 |   | 7.9%                 |
| 週に1日くらい   | 68.9%              | 73.0%                | » | 44.0%                |
| 週に2～3日くらい | 18.9%              | 18.0%                | « | 34.6%                |
| 週に4～5日くらい | 4.4%               | 2.6%                 | < | 10.9%                |
| 週に6～7日くらい | 0.0%               | 1.1%                 |   | 1.0%                 |

図表 8 子どもが所属する団体の1回あたりの活動時間（父親の関わりレベル別）

|           | 全く関わっていない<br>(296) | 1～3項目関わっている<br>(378) |   | 4項目以上関わっている<br>(405) |
|-----------|--------------------|----------------------|---|----------------------|
| 1時間未満     | 12.5%              | 8.7%                 |   | 5.7%                 |
| 1時間くらい    | 60.1%              | 64.0%                | » | 39.5%                |
| 1時間30分くらい | 11.8%              | 14.8%                |   | 16.5%                |
| 2時間くらい    | 9.5%               | 7.4%                 | « | 18.3%                |
| 2時間30分くらい | 2.0%               | 2.6%                 |   | 6.4%                 |
| 3時間以上     | 4.1%               | 2.4%                 | « | 13.6%                |

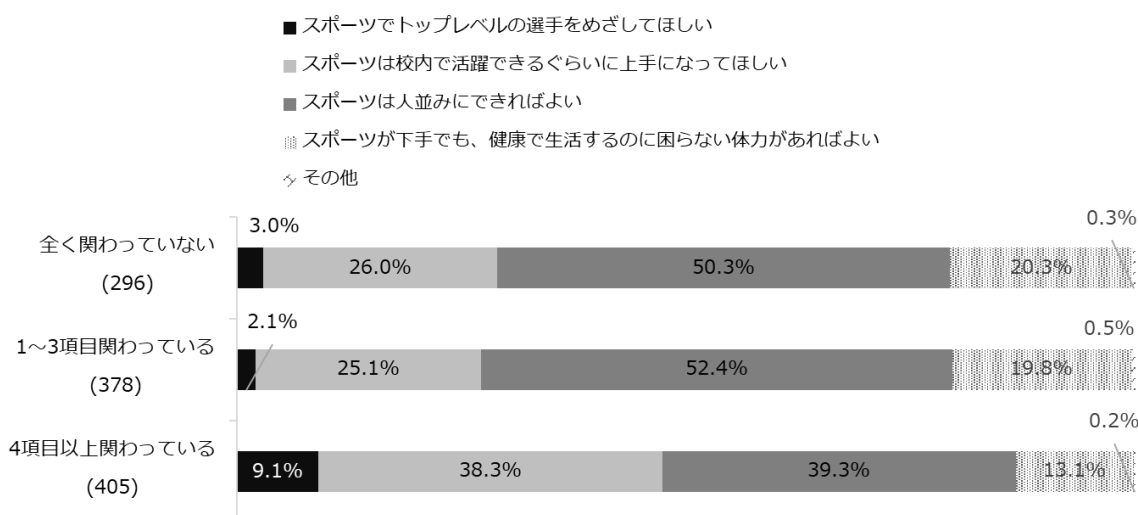
さらに父親の関わりレベル別に保護者の運動・スポーツ歴をみると、母親の運動・スポーツ歴とは関連がなかった(図表割愛)。父親では「4項目以上関わっている」群は他に比べて学生時代に運動・スポーツをしている割合が多く、特に「小学生のとき」は60.2%と高かった(図表9)。

図表 9 父親の運動・スポーツ歴（父親の関わりレベル別）

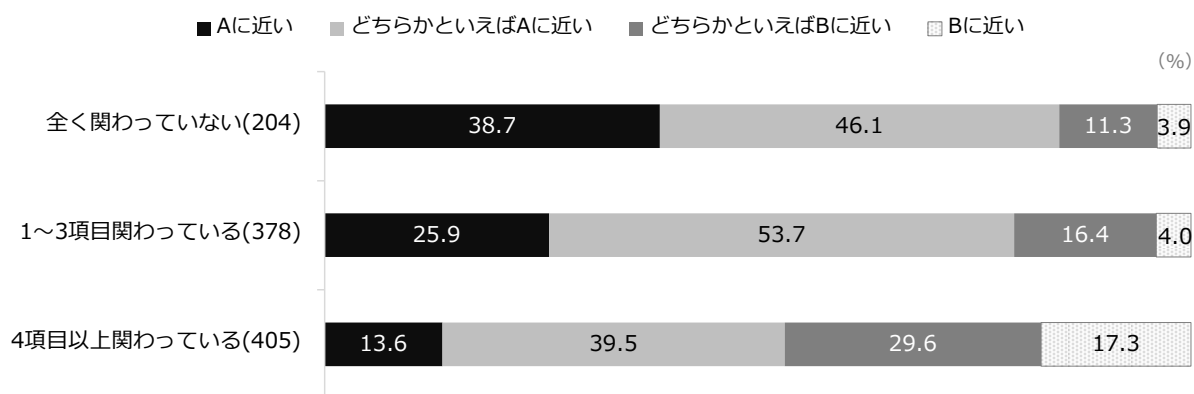
|                 | 全く関わっていない<br>(204) |   | 1～3項目関わっている<br>(378) |   | 4項目以上関わっている<br>(405) |
|-----------------|--------------------|---|----------------------|---|----------------------|
| 小学生のとき所属していた    | 52.9%              | > | 47.9%                | « | 60.2%                |
| 中学生のとき所属していた    | 44.6%              |   | 42.6%                | < | 51.6%                |
| 高校生のとき所属していた    | 27.0%              |   | 31.5%                | < | 36.5%                |
| 上記の時期に所属したことはない | 16.2%              |   | 18.3%                | > | 12.3%                |

子どものスポーツに対する保護者の期待をみると(図表10)、学校内で活躍する以上(「トップレベルの選手をめざしてほしい」+「校内で活躍できるぐらいに上手になってほしい」の%)を求める割合が「4項目以上関わっている」群47.4%に対して、「全く関わっていない」群29.0%、「1～3項目関わっている」群27.2%であった。父親の関与が多い家庭ほど子どもへの期待が大きい結果であった。また母親と父親のどちらが熱心に関わっているかをみると(図表11)、父親が「4項目以上関わっている」群の46.9%が、父親のほうがより熱心に関わっていると回答している。

図表 10 保護者の期待（父親の関わりレベル別）



図表 11 子どものスポーツに熱心に関わっているのは誰か（父親の関わりレベル別）



注) A:あなた(母親)の方が熱心に関わっている/B:配偶者(父親)の方が熱心に関わっている

以上、子どものスポーツ活動に関与している母親の負担感は、父親の関与により軽減されているとはいえない結果であった。これは父親が関与している場合でも母親が多く関与している実態は変わらないためと推察される。父親が全く関わっていない母親の負担感が大きいのは容易に想像できる。一方で父親が多く関わるほど母親の負担感は減ると推測していたが、父親が全く関わらない場合よりも負担感を持つという予想外の結果であった。

父親が熱心に関わる家庭の特徴として、第一に父親の過去の運動・スポーツ歴があるだろう。熱心に関わる父親は、自身が小学生時代に「スポーツ活動をする団体に所属していた」と回答した人が6割いて、中学校でも半数が何かしらの運動・スポーツを実施していた。「自分自身が打ち込んでいた運動・スポーツを、自分の子どもにもさせてあげたい」という気持ちから父親が熱心に関わっているのかもしれない。

第二に子どもへの期待感が高い家庭である。この点に関しては最初から母親も期待感を持っていたのか、父親の影響を受けて同じ思いになったのかは、本調査では分析ができない。ただし、こうしたスポーツ活動における家庭内の期待が、母親がより熱心に関わるように促す要因となっているように思う。

今回の結果から、父親が熱心に関わる家庭では母親がやりがいを感じている傾向がみられた。負担感に関しては、父親の関わりによって軽減しているとはいえ、むしろ熱心に関わる家庭では負担になっている可能性がみてとれた。後者については、父親ががんばる分、母親としてさらにならなければなら

ないというプレッシャーを感じている可能性があるように思う。周囲を含めて「子どものことは母親がより積極的にならないといけない」という雰囲気や思いこみがあり、そのために熱心な父親以上の働きを自分自身に課してしまい、結果的に疲弊することもあるのではないか。こうした「母親がやって当然・やるべき」という風潮が、母親の負担につながっているように感じる。

全体の結果からも、母親の負担は2016年度調査からコロナ禍を経ても、軽減されているとはいえない。本来であれば父親にも役割を担ってもらったほうが負担感は減るはずだが、そうならない背景として、上記で述べたような母親の役割に関するステレオタイプが影響しているように思う。

最後に今回の結果を踏まえて、今後に向けた課題を指摘したい。1点目は、父親が関わる種目の偏りとクラブ存続の危機についてである。父親が熱心になる習い事は、地域のクラブが主で野球やサッカーといった特定の種目に限定される。活動頻度も多く、1回あたりの時間も長いのが特徴である。母親によっては、自身は興味がなくても熱心なふるまいを求められる場面もあり、負担感が募ることもあるだろう。しかし、そうした状況を生み出し続けていくことは、本来誰もが気軽にできるはずの地域のクラブを敬遠していく要因となり、少子化の影響もありチームの存続自体を危うくする可能性がある。不要な係・当番は廃止していくことが望ましいが、すべてのクラブで簡単に実現できる問題ではない。ただし現状のままでは、将来的にこれまで多くの母親が負担を感じながらも支えてきたクラブそのものがなくなる可能性があることを、当事者に対してだけでなく、社会的にも伝えていく必要があると感じる。また、家庭内の分担という点では、自身があまり興味をもてない種目のサポートであっても、父親も関わる姿勢が重要である。

2点目は、父親を取り巻く環境についてである。2022年10月には「産後パパ育休(出生時育児休業)」の創設や「育児休業の分割取得」が施行されたのも記憶に新しい。男性は、職場では成果や出世へのプレッシャーがあり、家庭では良き夫や父親であることを求められる。母親と同様に父親も時代と共に、求められる役割は増えてきている。ただ実際に家事・育児負担はコロナ禍でも女性の方が多く、働く女性も一定数いることから女性への負担が多いことは否めない。子どものスポーツに関わっている母親と父親は、それぞれが大変な中で、サポートしている点を忘れてはならない。そこを踏まえた上で、父親の関わり方を考えた時に、母親中心の係や当番という体制になかなか入りづらいという気持ちも少なからずあるように思う。今後は、父親がサポートに入りやすい体制づくりも必要ではないだろうか。またスポーツの現場だけでなく、職場でも子どもが病気の時に取得できる看護休暇とは別に、子どものために取得できる特別休暇の設定といった環境整備も重要になってくる。もちろん制度にとらわれず、子育てをはじめとした職場外の活動がめぐりめぐって、仕事に活かされる可能性があることに期待をかけて、推奨するような社会風土が醸成されるのが望ましい。

こうした取り組みをすることで、子どもの運動・スポーツ活動の場において、母親が支えて当然という雰囲気を取り除き、ゆくゆくは「父親が関わるほど、母親が引け目を感じることなく、素直に負担感が減る」という本来あるべき結果になるように思う。さらに子どもの運動・スポーツの場に母親だけでなく、父親も関わることは、子どもの豊かな成長や家庭生活の充実は何より寄与するのではないだろうか。

(清水恵美)



## 4. まとめ

---

### 「ささえる」スポーツで母親が苦しまないために — 「当番」問題が映し出す課題

2016年度の調査から約5年、2回の経年比較が明らかにしたのは、「大きな変化はみられない」という事実であった。共働き世帯の増加、コロナ禍におけるスポーツ活動の停滞という大きな社会変化を受けてもなお、「子どものスポーツ活動をサポートするのは母親が中心」という構造は続いてきた。

一方で5年の間、クラブにおける当番制の問題を中心に、保護者の関わり方は多くの関心を集めるようになった。野球界では筒香嘉智選手が「お茶当番」の問題を指摘した発言が反響を呼び、近年では保護者の当番を廃止したクラブの事例がさまざまなメディアで取り上げられている。そのような状況下で、本調査もいくつかのメディアに掲載された。興味深いことに、取材や執筆のご依頼元には、ご自身が当番を経験した母親つまり「当事者」が多い。構造は簡単にならなくても、多くの人が声をあげ、状況が少しずつ変化している手ごたえを感じる。

本稿では改めて、「なぜ母親によるサポートを問題にするのか」「問題をどのようにして解決するのか」を整理し、2回の調査研究のまとめとしたい。

#### なぜ母親によるサポートを問題にするのか

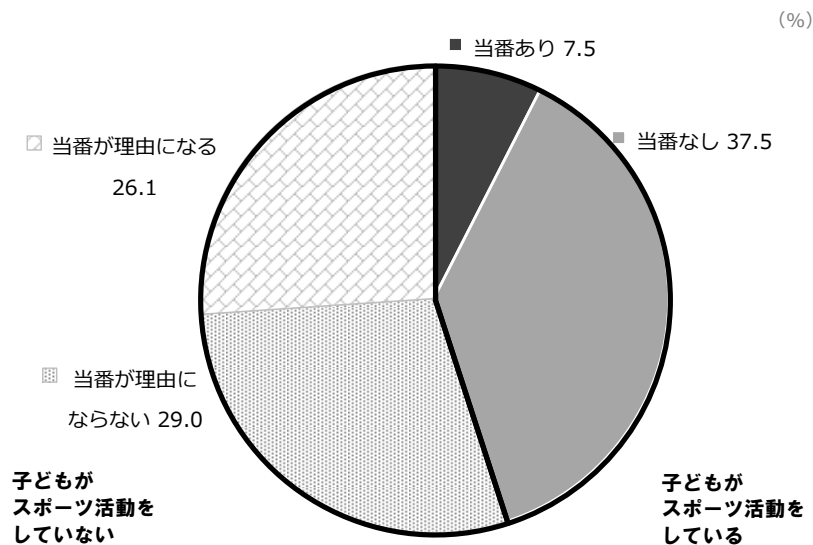
最大の問題は、「楽しむ」はずのスポーツで苦しんでいる人たちがいる—という点である。著者が取材を受けた新聞記事では、「親の手伝い当番 週末が怖い」という衝撃的な見出しがつけられ、ある母親がクラブの当番を通して心身の健康を害し、1年で辞める様子が描かれていた。我々もさまざまな方から話を聞く中で、ストレスを感じる母親、鬱になる母親、周囲から敬遠されながらも過剰なサポートにのめりこむ母親等のエピソードを耳にするようになった。「子どものスポーツ」のはずが保護者の負担や人間関係といった「大人の事情」にすり替わり、母親を苦しめている状況が確かに存在する。また、そのような母親の姿を目にしてつらい思いをする子ども側の話も聞かれる。

図表2-8の通り、実はスポーツの当番を担当している母親はごく一部である。調査結果(2章)の図表は「スポーツ活動をしている子どもの母親」「していない子どもの母親」にわけて数値を示すことが多かったので、改めてここで全体の分布を確認してみたい。

p46の図のように、対象となる母親全体を母数にすると、現在当番を担当している母親は7.5%にすぎない。しかし、当番の負担を理由にスポーツ活動を敬遠する母親は26.1%にのぼる。もちろんこの図はかなり単純化しており、「当番の負担」を理由にあげていても、実際には子どもの意向や環境面の理由も絡めて判断している家庭もある。反対に「子どもがスポーツ活動をしている—当番なし」の中には、当番があるクラブを回避してスポーツをする家庭も含まれる。そうした点に注意は必要だが、一部の母親しか経験しない当番の大変なイメージが、多くの母親を、その先にいる子どもたちを、スポーツ活動の機会から遠ざけている可能性が示唆される。

そしてもう1つの大きな問題が、この状況をスポーツの研究者が構造的な課題として取り上げてこなかった点である。2回の調査報告書で示したように、子どものサポートは母親に偏るうえ、母親の負担感は世帯年収や生活スタイルの影響を受けている。このような状況でありながら、母親の負担感に着目する研究は、専ら心理学的なアプローチばかりであった。

図「当番」をめぐる実態



注1)「スポーツ活動をしている」場合の「当番あり」「なし」は、母親が保護者会・役員・当番等に関わったか否かによってわけている(図表 2-8 参照)。

注2)「スポーツ活動をしていない」場合の「当番が理由になる」「ならない」は、スポーツ活動をしな理由で「保護者の係や当番の負担が大きいから」に「あてはまる」としたか否かでわけている(図表 4-2 参照)。

子どものスポーツ実施に対して、保護者のスポーツ経験・価値観が影響することは、先行研究からも本調査の分析からも明らかである。それゆえに、政策・施策において、保護者に対しては「いかにして子どもの運動・スポーツの重要性を伝えていくか」という点が重視される。子どもの利益を考えるとそうした視点の重要性は否定できないが、「当番」問題を通じてスポーツ活動をみると、「保護者をいかに巻き込むか」という視点と同じ程度に、「家庭にいかに依存しないか」という観点も重要と考えられる。

第3期スポーツ基本計画で定義されているとおり、スポーツは「自発的」な「する」「みる」「ささえる」を通して「楽しみ」や「喜び」をもたらし、「社会活性化等に寄与する価値」を有するものである。子どもたちが暮らす地域社会においても、スポーツを通じた人と人とのつながりが豊かな生活環境をもたらしている。しかし、その「地域社会を豊かにするスポーツ」という捉え方を、研究の観点では多面的に検討する必要があるのではないだろうか。ジェンダーの視点を入れるだけでも、子どものスポーツを「ささえ」てきたのは必ずしも親の「自発的」な行為とは限らず、長く母親中心に引き受けざるを得なかったシャドウ・ワークである—という側面が浮かび上がってくる。私たちはスポーツを敬遠する母親たちの価値観を問題にするのではなく、そのネガティブな経験やイメージを当事者の声として捉える必要があるのではないだろうか。

### 問題をどのようにして解決するのか

「母親が子どものスポーツ活動をささえる」というシンプルな事象ながら、「これさえ行えば解決する」という特効薬のような解は残念ながら存在しない。個々の事情から子どものスポーツ環境をめぐる問題、ジェンダーや格差の問題と、実に多層的な背景が広がっているためである。ここでは解決に資する3つの論点を提供したい。

## 1) サポートそのものの見直しをする

今苦しんでいる母親、あるいはそれによってスポーツ活動ができない子どもたちにとっては、問題の解決は喫緊の対応を要する。自由記述やインタビューからは、当番のあり方に疑問をもつ母親たちの声が多く聞かれる。「なぜ子どものスポーツのためにこんなことまでする必要があるのか?」「なぜ子どものスポーツなのに親が苦しまなくてはならないのか?」という疑問を抱く保護者は決して少なくない。

問題解決のためにあえて言えば、「子どものため」はマジックワードである。「子どものため」であれば、保護者の仕事は無限に増え続ける。練習や試合・イベントの機会を増やすことも、本来子どもが自分でできることのサポートも、大人どうしの付き合いも、どれも「子どものため」と言われれば断るのが難しい。たとえば「子どもが安全に活動するのに必要なことは何か」などと一段階具体的に考えれば、クラブによっては多くのサポートが義務ではなくなる。少子化や家族のあり方の多様化が進行する現在において、どの家庭にも同程度のサポートができる保護者がいるとは限らない。「サポートできる保護者の子どもしか活動できないスポーツ」ではなく、「活動したい子どもを保護者やスタッフが持続可能な範囲で支えていく」という発想の転換が必要である。もちろんそうした転換を保護者当人に押し付けるのではなく、競技団体やメディアからの積極的な発信が求められる。

## 2) 子どものスポーツ環境を考える

喫緊で目の前のサポートを見直すだけでなく、根本的には子どものスポーツ環境そのものを問い直す必要がある。図表 2-10 でみたように、保護者の組織や当番が存在するクラブは、活動時間そのものが長い。食事を挟む長時間の練習、毎週のように各地で行われるトーナメント方式の試合等、当たり前のように行われてきた子どものスポーツ活動が、保護者のサポートによって成立してきたことは本調査から自明である。

元バレーボール日本代表の大山加奈氏は雑誌のインタビューにて、当番の問題の裏に「勝利至上主義」の考え方がありと指摘している(『STORY』2021年11月号)。勝つため、強くなるためにはたくさんの試合を経験する、活動時間を長く確保する必要がある、子どもたちが競技に集中できるように保護者による最大限のサポートが必要である——一部のスポーツエリートを目指す子どもならともかく、そうでない子どもたちにとって、このような考え方が見え隠れする仕組みが適切なのだろうか。それが子どもたちにとって本当に価値のある環境なのか、改めて考える必要がある。

著者が取材に訪れたある場所では、「活動時間の長いクラブが無理」という声が複数の保護者から聞かれた。いまや少子化でメンバーの集まらないクラブも少なくない。ましてや都市部の場合、同じように子どもや保護者が時間・費用をかけるなら、他の習い事やさまざまな体験教室など、魅力的な選択肢がたくさんあり、旧来のスポーツ活動が選ばれなくなるリスクもある。

本報告書のいくつかのデータで示したように、そもそも子どものスポーツ活動の有無は一定程度、世帯年収に規定されている。費用だけではなく、当番等の人的サポートの負担も、世帯年収の低い家庭ほど強く感じている。地域のクラブは費用が安く、実はスポーツ活動における階層格差(家庭の経済状況による格差)を縮減する機能があると考えられる。しかし上記のような理由で子どもや保護者に選ばれなくなり、廃止になったとしたら、結局そのような場であれば活動するチャンスがあったかもしれない子どもたちが損をする。しわ寄せは、相対的に不利な子どもに向かう。

部活動改革の必要性が声高に唱えられていた頃、「プラス面ばかりをアピールするのではなく、マイナ

ス面をゼロにすることが重要」という指摘を何度も耳にした。学童期のスポーツ活動においても同様であろう。多くの保護者に敬遠されている要素をいかにして取り除くか、根本的かつ広い視野での改革が求められる。

### 3) 社会課題としてスポーツからの問いかけを行う

最後は、スポーツからみえる社会課題である。繰り返しになるが、子どものスポーツ活動は母親たちのシャドウ・ワークにささえられて成立してきた。図表 5-2 でみたように、このようなサポートが世代を超えて母親に偏り続けてきた点は、スポーツにとどまらない、社会全体のジェンダーの問題にもつながる。

ジェンダーの研究では、スポーツにおける性別分業が「主体である男性と手助けする女性」という構造を再生産させてきたという指摘もあり、その点には真摯に向き合わなければならない。一方で、子どもがスポーツ活動をするときに「家庭内の誰がサポート担当として出向くのか」という問題は、必ずしもスポーツのみの問題とは限らず、家庭内の性別役割分業、ひいては社会全体のジェンダーの問題を反映していると考えられる(この辺りの課題については、前章で清水が詳述している)。

「当番」問題は、一方でスポーツの課題であり、他方で社会全体のジェンダー構造の問題でもある。後者はスポーツの現場で容易に解決できる話ではない。むしろ、スポーツをきっかけに社会に対して問題提起をする一研究にはそのような役割が求められているように感じている。

以上、2 回の調査研究のまとめとして、「なぜ母親によるサポートを問題にするのか」「問題をどのようにして解決するのか」を整理した。各論については本報告書以外にも執筆している原稿があり、そちらもご参照いただきたい。

5 年後の調査が実施されるのであれば、その時には母親が苦しむ声を聞かずに済むことを願いたい。それ以上に、本来であればこのような調査研究が不要なスポーツ界・社会になることを願っている。

(宮本幸子)

## 本調査に関連するアウトプット(論文、外部発表、取材等)

笹川スポーツ財団,2017,『2017 年度調査報告書 小学生のスポーツ活動における保護者の関与・負担感に関する調査研究』,笹川スポーツ財団.

笹川スポーツ財団,2022,『2021 年度調査報告書 小学生のスポーツ活動における保護者の関与・負担感に関する調査研究(速報値)』,笹川スポーツ財団.

宮本幸子,2017,「小学生の組織的な運動・スポーツへの参加阻害要因に関する研究—母親の意識の分析をもとにして—」,『日本体育学会第 68 回大会体育社会学専門領域発表論文集』25,105-110.

宮本幸子,2018,「母親のソーシャル・キャピタルの「質と意味」に関する一考察—子どものスポーツにおける保護者の役割に着目して—」,『日本スポーツ社会学会第 27 回大会発表抄録集』,30-31.

宮本幸子,2021,「誰が子どものスポーツを「ささえる」のか—家族のサポートから考える—」,笹川スポーツ財団ウェブサイト. [https://www.ssf.or.jp/thinktank/sports\\_life/column/202101.html](https://www.ssf.or.jp/thinktank/sports_life/column/202101.html)

宮本幸子,近刊,「子どものスポーツ活動をめぐる母親たちの社会関係資本—なぜ母親たちは「周縁的役割」を担い続けるのか—」,『スポーツ社会学研究』.

朝日新聞 2021/5/20「送迎とお茶当番は母親？スポーツ活動にジェンダーの影」  
<https://www.asahi.com/articles/ASP5G4R5VP4ZUTQP008.html?pn=25>

朝日新聞(紙面)2021/6/8「親の手伝い当番 週末が怖い」内コメント「それって母親だけの役割ですか」

NHK「視点・論点」2022/2/22「子どものスポーツへの親のサポート」

<https://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/400/460703.html>

新潮社フォーサイト 2022/4/11「コロナ禍で子どものスポーツの「当番」はどう変わったか」

<https://www.fsight.jp/articles/-/48778>

日経新聞(紙面)2022/9/1「親の叱責で子がスポーツ離れ 関与減らして成長促す(生活)」内コメント

## 引用文献

鈴木宏哉,2015,「運動・スポーツと運動あそびの実施実態と関連要因」,『子どものスポーツライフ・データ 2015 4~9 歳のスポーツライフに関する調査報告書』16-21,笹川スポーツ財団.

内閣府「男女共同参画社会に関する世論調査(令和元年 9 月調査)」

<https://survey.gov-online.go.jp/r01/r01-danjo/index.html>

鷺田康,2019,「筒香嘉智が語った、少年野球における「母親の問題」と「お茶当番」」,文春オンライン,

<https://bunshun.jp/articles/-/10547>

---

**小学生のスポーツ活動における保護者の関与・負担感に関する調査研究(2021)**

2022年12月発行

発行者 公益財団法人 笹川スポーツ財団

〒107-0052 東京都港区赤坂 1-2-2 日本財団ビル 3階

TEL 03-6229-5300 FAX 03-6229-5340

E-mail [info@ssf.or.jp](mailto:info@ssf.or.jp) URL <http://www.ssf.or.jp/>

---

無断転載、複製および転載を禁止します。引用の際は本書が出典であることを明記してください。

本事業は、ポートルースの交付金による日本財団の助成金を受けて実施しました。